
アンノウン・プリンセス

雨月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アンノウン・プリンセス

【NNコード】

N8355A

【作者名】

雨月

【あらすじ】

前作最後、友達にダンボールに包まれ魔界に送られた罪人天使の天道時々雨は魔界地下支部の大会にプリンセス候補と一緒に出る事になったが・・・。

そのいちー！ プロローグだつたらこにな！」の出版に（前書き）

美奈さん（間違えましたー皆さんですねー）のお陰で時雨君はまだまじけそうです！これからは前作よりあまり書けないかも知れませんが頑張ります！

そのいち！－ プロローグだったらいにこの出でに

僕、てんどうじ天道時 じべれ時雨は助けを求めています。

ここは魔界、なぜ人間界にいた奴がこんなヤバ気な雰囲気の場所にいるかといいますと、僕がとてもなく悪いんです。僕の記憶が正しいなら僕の友達に雑巾を顔面にぶつけてしました。多分彼はそれを怒り、僕を魔マの宅急便で魔界に送りこんだのでしょうか。なんとなく違う気がしますがこれであつていると思う今日この頃です。

「・・・みんなどうしているかなあ？」

辺りに僕以外に誰もいないので自然と独り言を言ってしまいます。寂しいんです・・・。そして故郷のみんなを頭に・・・思い浮かべる事が出来ません！

「・・・あれつ？」

どうしてでしうか？ぼやけてしか頭に思い出すことが出来ないです。（頭を強く打つんだろうか？）とりあえず、『プリンセス』候補を只今捜しています！知つての方は至急、ご連絡ください。ヨレヨレの学生服を着た人が魔界でまつてますから。

流石に歩き疲れたので休憩をとりたいと思います。

「・・・・・ふう。」

「お疲れですねえ、そこのお兄さん。」

「・・・まあ、人?を捜しているんです。それがなかなか見つからなくて・・・」

「どういう人ですか?良ければ私が捜しましょうか?」

「いえいえ、気持ちだけで結構ですよ。」

「じゃあ、せめてその人の体型なんか教えてください。もし見つかったら連絡しますよ?」

僕は先程まで入っていたダンボールの中に書かれていた事を思い出すことにした。

『・・・君が捜すプリンセスは次のような人物である。君が好きそうな奴だから安心してくれ!まず、ペッタンコだ!そんで身長は君より小さい。以上!』

「・・・えーっとですね。ペッタンコで身長は小さいそうです。」

「そうですか、わかりました!・・・すいませんが私も人を捜してるんです。出来ればその人と会った場合、捜していますと伝えてほしいのですが?」

「あ、はい!大丈夫ですよ?」

「従兄弟から聞いたのですが、その人は青いヨレヨレの学生服を着ているそうです。」

「あ、はい！わかりました！そんな格好してるなら直ぐ見つかりますよ！」

奇遇な事もあるものだなあ。僕も青いコロコレの学生服を着ている。

「ありがとうございます。貴方も見つかることですね！」

悪いと思つたけれど男の性かな？ついつい目が相手をチェックしてしまう。

・・・・・ペツタンコだ。おまけに身長は低い多分、小学生ぐらいかな？失礼だが年を聞いてみることにしました。

「・・・失礼ですがおいくつですか？」

「・・・えーと、十七です。」

僕より一歳年上だ。

「私、魔界のプリンセス候補なんですよ！今探してる人と一緒に大會に出るんです！」

うわあー！この人かなり嬉しそうだなあ。

「従兄弟に聞いてるけどかなり優しいそうですよ！」

「へえ、会つてみたいですねえ！」

どんな人だろう。

「そしてかなりぬけてる所があるとか・・・。」

「その人は多分大変でしょうね？」

あれ？この人なんか笑つてるような気がする。

「・・・気が付かないんですか？」

うーん、もしかして世界の窓が開いてるかな？・・・いや、違うなあ？

「考えている顔も素敵ですよ？天道時 時雨君？私が貴方の相棒ですよ！名前は霜崎瀬里奈といいます。ちなみに亜美の姉です。噂は聞いてますよ？小さい子は背中に乗つてもいいんですよね？じゃ、遠慮なく！」

世界は・・・狭いものだなあ。

それに 始まる大会は恐怖である。（前書き）

うーん、なんかいろいろ人がでてきます。

それに 始まる大会は恐怖である。

霜崎 濑里奈 十七歳
イノセント・エンジェル

断罪天使身長 小さい そしてペッタンコこれが僕の相棒の人の大体の見た目である。性格はいたずら好きで人をからかうのが三度の飯より大好きらしい。普段はいたつて甘えん坊将軍である。

僕と瀬里奈さんはとりあえず歩いている。

「…………すう。」

実際、歩いているのは僕であり瀬里奈さんは僕の背中で寝てしまっている。

出会つてから少し経つ。ずっと歩いていたからか、街が見えてきた。

「…………うん、もうちょっととかな?」

瀬里奈さんは普段魔界におらず、天界で暮らしているそうだ。彼女はそれ以外の事をあまり多く喋りつつしなかつた。理由を聞こうとすると

『大人の女に秘密を聞いてはいけないわ、時雨君。』

と言わてしまいそれ以後、僕は尋ねていない。（見た目まだ幼いんだけどなあ。・・・・・実際、彼女は十七歳であるから未成年じゃないのかな？）

僕がそんな事を考えていると街の前にいた。街には門が建つており、更に警備兵が一人立っている。

「・・・何かこの街に用があるんですか？」

右に立っている方が僕に尋ねてくる。

「この街で魔王を決める大会が行われるんですか？」
僕は正直に尋ねた。

「そうだ。」

瀬里奈さんが起きたようだ。背中で動いている。・・・かなしいかな？柔らかい感覚があまりしない。（一応あるみたいだ。）

「僕たちその大会に出るんです。入つていいですか？」

うーん、かなり睨まれてるような気がする。

「いいだろう。通行を許可しよう。」

礼を述べ、黙つて門の中に行く僕たちを門番さんが引き止める。

「・・・少年、後ろにおんぶしている少女は妹か？」
違います。と答える前に瀬里奈さんが門番に答える。

「私はこの人の大事な彼女よ。」

僕と門番が絶句。そして今まで黙っていた片方の門番が喋った。

「・・・あまり幼い子は犯罪になるぞ。」

「・・・大丈夫です。この人は・・・」

さて、何て言おうかな？

「それより僕はこの子の保護者です。」

「これで『しまかせたかな?』

「・・・少年、嘘をついてますと顔に書かれているぞ。まあ、大会頑張つて来てくれ。」

「・・・僕には嘘は無理かな?」

街に入ると大会のポスターが色々な所に貼つてあった。大会が行わる予定の場所は街の中心にある大きな建物。

「時雨君ー、デートしようつー、デートー!」

僕が瀬里奈さんを背負つていたら犯罪者と間違えられると思いますがそことのじりじりうでしようつ。

「・・・また今度にしましょう。今はあの大きな建物に行きましょう。もうそろそろ始まる時間ですよ。」

ポスターに書かれていた時間まで後少し。

「ぶつうー、わかつたよつー、時雨君、早く行つて終わらせよ。みひみせりよつよ。」

大会本部一階。僕たちはそこで受付に向かつといつである。
「大会に出る者はどうしたらいいんですか?」

「受付のお姉さんに尋ねる。」

「あ、大会に出る方ならあひらの階段の上になつております。」

「ありがとうございます。」

僕は一段飛ばしで階段を駆け上がる。もつそんなに時間がないみたいだ。

「時雨君、多分そんなに慌てなくていいよ。」

「・・・念のためだよ。」

階段を駆け上るとそこは・・・学校みたいな作りになつており、簡単に説明すると廊下であった。

辺りを見渡すと誰もいない。何故だろう?

突然、スピーカーがなり始める。

『校内放送、これより開会式を始めます。一、始めの言葉を魔界地上の現魔王をしておりますハデスさんです。』

『はい、皆様こんにちわ!ハデスと申します!今回の大会には特別ゲストがいます!私のお兄ちゃんです!お兄ちゃんは・・・』
『はい、ありがとうございます!おのろけ話は結構ですので次に進みたいと思います。一、ルール説明。ハデスさん、お願ひします。』

僕たちは放送を廊下の隅で聞いていた。

「・・・ハデス・?」

「知り合いなの?時雨君。」

「うーん、知ってるけど顔がわからないなあ。」

『ルールは簡単です。トーナメント方式で闘つてもらいます。ステージは地下にありますので試合のあるかたは地下にきてくださいね？ちなみに言いますと今回、身長制限の規制が緩やかになりました。身長が低い人は補助の人気がついてます。大会参加者の中に一人だけいます！そして！その補助している人が私のだーい好きで優しいお兄・・・・』

『・・・・・はい、ルール説明ありがとうございました。今回、身長制限が緩んだので楽しくなりそうですね！今日は試合はありませんので各自、帰つて結構ですよ。』

身長制限？ジェットコースターにでも乗るんだろうつか？
「つまり、僕だけしかいないのか・・・・・」

その時、廊下の向こうから誰かが走つてきた。

「おにーちゃん！」

「時雨君、誰かが走つてくるよー迎撃する？」

「危ないからしなくていいよー・・・それに何処かで聞いた感じの声のような気がする。」

走つて来たのは女の子であった。

「おにーちゃん！久しぶりー！ハーテスだよー。」

ハーテス？さつきのひとだ。

「忘れたかな？おにーちゃんによくオレンジジュースを買つてもら

つた。」

僕の頭のなかで欠けていた記憶の断片が戻つてくる。

「……あー思い出した！元気だつたかい？」

途端笑顔になるハヂス。

「エヘヘー！元気だよー」

しかし、ハヂスはこんなに明るい子だつたかな？そんな事を考えていると話に加わつてない瀬里奈さんが入ってきた。

「ちょっとーあんた私の時雨君のなんなのよー」

「私はねーおにーちゃんのハヂスだよー！」

「答えになつてないわよー！」

「あ、おこーちゃん。大会中まゝこの街のマンションに止まつてねー」

「あ、僕お金ないよー！」

ちなみに僕の財布は家にある。

「えー大丈夫だよー私が管理してるからー。」

「で、でもさあなんか御礼しないと……。」

僕がそういうとハヂスはニヤリ？と笑い更に僕の近くによつ耳元で小さく喋つた。

「じゃあ、料金もらいますね？」

それはあつという間に終わつた出来事だ。
ハデスが顔を近付け僕の顔にふれた。

ちゅつ。

「なにい！人が見てんのに契約しやがった！」

後ろの瀬里奈さんが叫ぶ。僕は何が起こつたかよくわからなかつた。走り行くハデスをぼーっと見ながら僕はまぬけみたいに一人（正確にいうと二人だ。）立つていた。

その後、瀬里奈さんは当然僕と話してはくれずずっと僕の背中に顔を押し当て黙つていた。

ハデスから言われたマンションを見つけ（この街にはマンションが一つしかなく、基本的にこの街はあまり住人がいないらしい。）中に入り管理人さんを捜す。管理人室を見つけだしノックする。

「すいません！新しく入るよくなつている者ですけど。」

そう言つてから少し経ちいのかな？と思つた頃に後ろから返事が帰つて來た。

「・・・あの、どちら様でしょつか？」

振り返ると黒淵眼鏡の長い髪をした人？が立つていた。・・・両腕にスーパーの袋をさげて。

「あ、実は今日からここに住む事になつたらしい者ですがあなたが管理人さんですか？」

「えーと、天道時 時雨さんと霜崎 濑里奈さんですか？」

「どうやらこのマンションでよかつたよつだ。」

「あ、自己紹介がまだでしたね！私の名前はペイル・シュトーラとい
います。。ちなみにサキュバスです！」

「サキュバス？何だつけそれ。とりあえず・・・」ひちも自己紹介
をきちんととしたほうがいいかな？」

「僕の名前は天道時 時雨です。一応罪人天使です。そして後ろの
人が断罪天使の霜崎 濑里奈さんです。」

自己紹介が終わってふと、管理人さんを見ていると眼がキラキラ
している。

「うれしいわ！初めてのお客様が天使なんて・・・！」

しばしきラキラしてから僕たちの部屋に案内してくれた。

「私の隣が貴方達のお部屋になっています！」

中に入つてみるとなかなか清潔感があり結構好感を持てた。荷物
という荷物がないので更に奥の部屋にいってみると部屋が合計三つ
あり、ダイニングが一つあった。

一つを僕の部屋にしてもう一つは瀬里奈さんの部屋にしよう。残
った部屋はまだ使わないだろつな。

「瀬里奈さん、マンションに入りましたよ！」

返事がない。ただの人形のようだ。

「…変わり身の術？」

本物は何処に・・・?

シャワーの音が聞こえる。多分シャワーを浴びにいったのだろう。

「除きに行かなくていいのか？時雨。」

久しぶりに登場した天使。彼は僕の知恵袋である。（姿は僕をかなり小さくした大きさで普段は僕の肩に乗っている。）

「何言つてんだよ！行く訳ないだろ？？」

普段は僕のいう事をあまり聞いてくれないが今日は頷いてくれた。

「・・・そうだなあ。時雨の言つ通りだな。やつぱり。」

僕は何となく天使がまえより聞き分けのある奴になつたなあと思つていた・・・・・が。

「覗くならもうちょい出た人がいいな・・・・・・。あんなの見つて別に嬉しくないからな。」

本人が聞いたらやつぱり怒るかな？すると本人が扉を開け、タオルを巻き腕を組んで僕を見ている。

「・・・時雨君、お腹空いたから何か作つて！」

私かなり怒つてます！オーラを体から噴き出しながら僕に頼み事をしている。

「え、うん。頑張つてみるよ。」

僕は冷蔵庫の中をチョックして（驚く事に沢山材料が入っていた。）材料を取り出そうとしてから手を止めた。

僕は料理が全く出来ない。

その事を言おうとして瀬里奈さんの方を向くと彼女はテレビ（なかつたはず）を見て笑っている。

服は着ておらずタオルのまんまだ。

「・・・あまり出てないのにタオルなんかしても無意味じゃないか？」

天使は僕に尋ねてくる。僕は苦笑してその返事をしなかった。

「瀬里奈さん、タオルじゃなくて服を着てください。」

「やだー！」

「・・・まるで子供もだな。」

天使は呆れているが僕はあきらめなかつた。その後の説得で服を着せるのに成功！

「・・・実はですね瀬里奈さん。僕、料理した事がありません。」

絶句する瀬里奈さん。

「・・・すいません、今から何か買つてきます。」

そして扉を開ける。そこには管理人さんがうわづりしている。

「・・・管理人さんどうしたんですか？」

ビクッと止まる管理人さん。右を向いていた首が口ボットのよう
に動きこいつを向く。

「あ、あのですね！歓迎パーティーをしますから私の部屋に来ませ
んか？私が料理を作りますんで。・・・どうでしょうか？」

料理と聞いて瀬里奈さんが部屋からしてきた。

「はいっ！ぜひとも行きたいと思います！」

管理人さんに連れられて管理人室に入る。中は僕たちの部屋とあ
まり変わりはなく、違う所は部屋に色々な家具が置いてあることぐ
らいかな？

管理人さんは早速調理を開始して、瀬里奈さんはテレビをつけて
笑いながら見ている。

僕は・・・管理人さんから料理を教わる為に彼女の隣に立つ。

「あ、座つていいですよ！私が料理しますから。
僕が来た事を手伝いにきたと勘違いしたらしい。

「いえ、実は僕料理出来ないんです。だから少しでもいいから料理
を見て覚える事が出来たらいいなと思いました・・・」
僕はすまなさそうに言いながら管理人さんを見た。

「わかりました。今度また部屋に来て下さい。私が知っている事は
教えましょう。今回は座つててください。」

料理を教えてもらえるようになったのでこれからは少しでも料理

が出来るよつになればいいかな？

僕は瀬里奈さんの隣に座りテレビを見始めた。

「・・・時雨君、何話してたの？」

隣に座っている瀬里奈さんがテレビに視線をあわせたまま僕に質問をくれる。

「えっとね、料理を教えてもらおうようになつたんだ…これで飢え死にしなくていいかな？」

瀬里奈さんの横顔は何となく不満みたいだ。そんなに僕の料理はいらないのかな？

「大丈夫！きっと上手くなつてみせるからさ。そんなに不満そうな顔しないでよ！」

「」
いちを見てキヨトンとしている。・・・僕は間違えた事をいつただろうか？

僕が一人悩んでいると瀬里奈さんが僕にまた尋ねて來た

「・・・それ私の為？」

「え、うん。そうだよ。」

今の瀬里奈さんはうれしそうな顔になつている。

「ありがと、頑張ってね！」

瞬間、瀬里奈さんの顔がかなりおとなびた感じがしたのは僕の気のせいではない気がした。

「」
の人は何か隠している気がしてならない。

「時雨、こいつは化けるかもしれないな。・・・気をついたほうがいいことうだな。」「

天使も僕に警告している。

その後、運ばれてきた料理はどうも美味しいもので僕にこんなものが作れるか不安になつた。（瀬里奈さんはずっと二口二口顔で料理を食べていた。）

食べ終わり、みんなあとかたたずけをして管理人さんに御礼を言う。

「ありがとうございました。」

「また来ていいですか？」

瀬里奈さんが甘える。管理人さんは頷き僕に料理を責任もつてきちんと教えるといつてくれた。

部屋に戻り、瀬里奈さんがした事はまたシャワーを浴びる事であった。

「覗かないでね！時雨君。」「

いたずらに笑う瀬里奈さんはやはり子供もじみた顔であった。

「へ、どうせ見たつてうれしくもなんともないな！」
いつも言つているのは天使であり、僕ではない。

「覗きませんよ。」

そういうて僕は自分の部屋に入りベットに横たわる。（この部屋はベット一つ以外になにもない。残りの部屋も一緒である。）

そして、これから的事を考える。

（家具もあまりない。お金もないし、仕事もない。持っている物は・・なんだろう？）

そして天使がいない事に気がついた。

「あれ？ どこ行ったのかな？」

部屋を出て探してみる。

お風呂のある所の近くに血だらけになつた天使が倒れていた。

慌てて近寄ると血だらけなのは鼻血のようだ。もしかして・・・

瀬里奈さんで鼻血だしたのかな？

「まさか覗きに行って・・・・・鼻血だしたの？自分は文句言つてなかつた？」

天使は僕のほうを向き、フツと笑い（本人はカツコつけているらしい。この場合、出すのは鼻血ではなく口から血をはくものだらうに。）こう言った。

「時雨、奴は化けたぜ。あいつは・・・お子様じゃない・・思ひ出すぜ・・ぶはつ！」

また鼻から鼻血を撒き散らしながら僕の腕の中で動かなくなつた。そして天使は消えた。いつもの事なので心配はあまりしない。（

今回は自業自得だと思つ。）

僕は雑巾で血の痕を綺麗に拭いていき最後の箇所を拭き取る。

そこには風呂場の前であり中からはシャワーの音がする。

「はっ！ いけない！」

僕はやつたとその場を後にしてテレビが置いてある場所まで戻った。

床に写真集が落ちていた。この部屋に居るのは僕と瀬里奈さんだけだ。つまり僕の物ではないので必然的に瀬里奈さんの物であるみたいだ。

表紙は写真集としか書かれておらず、手づくりのようだ。瀬里奈さんは悪いが少し見てみよ。

「撮った人、生徒会メンバー 舞？」

めくつたページにカメラマンの事が書かれていた。・・・どこかで聞いた名前である。

うんうん唸つてみると写真集が取り上げられてしまった。

「・・・時雨君、何見てるの？..」

正直に謝る。「

「『』めんなさい。落ちたから気になつたんだ。誰の写真集かなつて。」

瀬里奈さんは赤くなり答えた。

「・・・それはね、私の大好きな人が載ってるのよ。亜美的友達に作ってもらったのよ。彼女が剣治からの仕事を頼まれた時にその人の写真を撮つたんだつてさ。」

「うーん、あ、舞つて誰か思い出した!」

何となく記憶が無くなつてゐる自分が悲しくなつたが、思い出したのでよかつた。

「じゃ、私は寝るわ。お休み! 時雨君、もし怖かつたら私の所に来ていいわよ。」

「うーん、お姉さんぶつてるけど見た目があれだからなあ。

瀬里奈さんは扉を閉めた。僕はまだお風呂に入つてないので入つて寝る事にした。

お風呂に入つたのでさつぱりなつた僕は自分の部屋に戻る。ベッドの上に瀬里奈さんが寝てゐる。

いや、もしかしたら僕が間違つてゐるのかもしれない。ここは瀬里奈さんの部屋なのかも。起こさないよう静かに部屋を出てから反対側にある僕の部屋(だと思つ)に入る。

そこにも・・・瀬里奈さんがベッドに寝ていた。

もう一度さつきの部屋に戻る。

ベットの上には何も居なかつた。

「僕は少し疲れているのかな？」

そのままベットにダイブ！目を閉じて夢の世界への切符を買づ。
そして、夢の世界行きの電車がやってくるのを待っていたら……
・現実に戻された。

何かが僕の上に乗っている。瀬里奈さんかな？

「あの、すいません。どうてくれませんか？」

まず頼んでみる。すると返事が帰つて来た。

「私と遊んでくれたらどうしてあげる。」

その声はよく透き通る物だった。

僕は仕方なく頷き、なにをして遊ぶか聞いてみた。

「何して遊ぶ？」

「じゃあ、鬼！」――貴方が逃げて私が鬼役するからや。捕まつたら覚悟してね！」

罰ゲームまであるのかあ。僕はそんなのんきな事を考えていた。

「時間は朝まで！」

・・・・朝まで？そんなに瀬里奈さんは鬼！これが好きなのかな？

「何処ですか？」

場所がわからなければできない。

「・・・いい所案内してあげる。」

瀬里奈さん？が指を鳴らすと部屋が広大な墓地になつた。

「少し経つたら追い掛けてくるからね。」

空は紅い。だが魔界ではないような紅色だ。そして奥まで紅いなにもかも紅い世界。

僕は人？らしき影に話し掛ける。

「I/IJは何処ですか？」

「地獄。」

影は消えた。

「お兄さん、もうやうやく数え終わるよ？本気でしないと痛い目以上を見るかもよ？」

・・・・・どうやら僕は寝ぼけていたようだ。彼女は瀬里奈さんではない！

「タイムツー君に聞きたい事があるつー！」

「何かしら？スリーサイズ以外なら教えてあげますよ。」

「へつ、怠慢出来ないくらいだからだな。」

いつの間にか天使が肩に座っていた。

確かに彼女は身長は高いがあまり胸がないかなあ？

「・・・そんなに見ないで下さい。恥ずかしいですよ。」

「あ、す、すいません！」

「ペッタン」が何恥ずかしがつてんだよ！』

天使は文句ばっかり口にしている。

「あの、地獄と魔界は何処が違うんですか？」
今僕がかなり気になる事を素直に聞いた。

「簡単にいうと魔界は他の世界です。つまり、同じ空間に存在している地球みたいなものです。そして地獄は死後の世界です。」

なーるほど。

「じゃああっちにいる人の影みたいな物はなんですか？」

「いわば魂ですね。死んだ人がここに来ます。」

じゃあ、僕は・・・。
「僕は死んだんですか？」
首を振る謎の少女。

「いいえ、貴方は死んでません。私がさつき喚びましたよ？貴方も知っているでしょう。私と遊んで下さい。」

「なんですか？」

「惚れました。」

はい？

「ヒューーーもてるね時雨君ー！ペッタンコ！」

天使が僕をからかう。

「それでは、そろそろ鬼は動きますかね？・・・・・言ひときますが私に捕まつたら結婚してもらい、地獄を管理してもらいます。」

僕はさつと空に昇った。

「天使！まだ僕は料理を覚えてない！そんな夫をもつたらあの子が可哀相だ！だから僕は捕まらない！」

「え、それが理由か？」

「だから、だからお願ひだ！力を貸してくれ！」

「分かつたいいだろ？。・・・。」

僕は少し記憶を失っている。記憶は僕の力になつたらしい、何故かそれがわかる。

紅い月の手前で体を紅い光がつつみこむ。

『私は、天界を創りし始天使。そして、源初の罪人。』

悪魔の力は千夏姉さんがいないみたいだから使えないのでも羽は紫にならない。

紅い羽が一つ増え合計四枚の羽が紅い空にはためきだした。

地上では先程の少女が待つていいようだ。

・・・・もしかしたらあの人は飛べないのかもしれない。

それから一時間、僕は空にいる。地上では少女が手を振る回しながら文句を言つてゐる。

「・・・・卑怯ですよー鬼ごっこで空に逃げるなんてー！」

・・・確かにそつだなあ。卑怯だな。うんー。

「じゃあ、僕が地上に降りてから十秒数えて下さい。それまで手出しありで下さいね？」

「わかりました。」

華麗に地上に着地。ボーッとしている時間はない。

「1・2・

後残り八秒。

「3 4 5 6 7 8 9 ・ 10 !

「ちよつとまつてくださいー！それは卑怯ですかー。」

走つてぐる少女が自分の耳を示す。・・・耳に何か詰めているらしい。

「・・・何かいましたか？私には聞こえませんね。」

僕は地上を走るように飛んだ。後ろから迫る鬼さん。もう少しで捕まる所で異変が起きた。

鬼さんがいきなり止まつたのだ。

「・・・どうやら今回は私の負けみたいですね。月を見てください。」

紅い月は沈んでいる。

「・・・月が沈めばそれは朝ですね・・・。」

月が完全に沈むと辺りの墓地も消えた。

・・・・・僕は一人部屋に立っていた。窓の外は暗い。（ここは地下だが、昼のときはかなり明るくなる。）先程の事は夢でかたづけていいだろ？　また僕はベットに潜る・・・・・・が眠れなかつた。

朝になつた。瀬里奈さんが先に起きて異変に気が付いた。

「・・・・・？」

やはり僕は怖かったので瀬里奈さんの隣で眠りせりむけた。・
・ 黙つて。

「うわー…それは反則ですよー…ちゃんと数えてくださいー!」

起きた僕の顔にはクマが出来ていた。ちなみに起きた体制は最悪なもので瀬里奈さんに抱き着いていた。田の前にいた瀬里奈さんは赤くなりながら挨拶をしてくれた。

「おはよー、時雨君。・・・・・うれしいんだけ少し強く抱きしめすぎだな。はなしてくれないかな?」

「わあっーすいませんー!」

その後僕は瀬里奈さんにこの話をした。・・・・・が笑われてしまつた。

「ほりつ、時雨君、テレビでトーナメントの発表があつてるよー!」

瀬里奈さんは今日の試合にでなくてはいけなかつた。(僕の事でもある。)

対戦相手はシスウエルという人であつた。

あの地下に行くと観客が沢山いた。

省略していろいろ長い長い話を聞いてから僕たちは勝負の場所に向かった。

『今回、貴方がたには鬼ゴッコをしてもらいます。』

嫌な戦いだな。

『それでは！両者入場！』

相手を見て驚いた。・・・・地獄にいた少女である。

「今度こそ貴方の心もらいますよ。」

僕に人差し指を向け声高らかに宣言する。

「・・・・あの～、僕お腹痛いから棄権していいですか？」

僕は逃げ場を探したかった・・・・ただそれだけである。

「棄権はできないよ時雨君。ルールなんだって。」

僕と瀬里奈さん対シスウルさんの鬼ゴッコの始まりは近い・・・

それに 始まる大会は恐怖である。（後書き）

やー大変です、時雨君。以前は董が時雨君のところにきましたが、今回は時雨君が怖い思いをするはめになりました。さて、遂に始まつた大会。彼等は優勝できるのかーそして鼻血ぶーだった天使が言いたかった事はなんだーこの辺に注目してもらえるとうれしいですね。最後に、やはり評価してもらえた嬉しいです・・なにもしてあげれませんが。

そのせん サプライズゲストと鼻血ぶー（前編め）

今日は短いよつな氣がします。

そのあと サプライズゲストと鼻血

「…………じやんけんせん！」

鬼ゴッ 「はたいてこじやんけんで決める事が多いたるつなあ。そして僕はじやんけんがめつぱつ弱い。

「あ、私が勝ちました！」

この鬼ゴッ 「は特殊な物で、勝つたほうが鬼がいいか逃げるほうがいいか決めれるらしー。

「じゃあ、私は鬼でいいですよー！」

『シスウェル選手が鬼のようですね。そして時雨選手と瀬里奈選手が逃げるようです！』

「じゃあ私は右から逃げるからね？」

戦場は地下ではなく近くにある学校である。

「…………じゃあ僕は左から逃げるから。」

『なお、鬼を迎撃して結構です。』

なんてルールだ。

僕の耳元で天使が喋る。

「じゃああのペッタンコを早くこじり迎撃しておけばいい。」

勿論僕はその申請を却下する。

「駄目だよ。そんなことしちゃあ。」

天使は少し恐い顔になり僕に話始めた。

「時雨、お前はいつもそつだ。眞面目に戦おうとしない。．．．。言つておくが身体はお前一つの物ではないんだ。お前が傷つけば俺も痛いんだ！タンスで小指をぶつけた時は身もだえしていた。今度からお前が傷つけられそうになつたら悪いが身体は使わせてもらつからな！いいな？」

確かに、僕は一度も眞面目に相手を傷つけようとしたくなかった。

「．．．わかったよ、そのかわり相手は絶対傷付けないでね？
ヤレヤレといった感じに首を縦に動かす天使。

「．．．いいだろ。それじゃ身体を借りるぞ？」

僕の意識はブラックアウト。その後なにが起つたかさっぱりわからなかつた。

「．．．時雨君ー！起きてー！」

誰かが僕を呼ぶ声が聞こえる。辺りからは歓声が聞こえる。

『・・・・信じられない。大会新記録だなんて・・・』

ついでにアナウンサーのお姉さんの困惑した声が聞こえる。

「う、うーん?」

段々はつきりする僕の脳みそ。辺りを見渡し、どうやら廊下に座つているようだ。隣に瀬里奈さんが居て僕の目の前にはシスウェルさんが倒れている。

何があったのだろう?

「ビックリしたよ! 時雨君があんな事言い出すなんてわあ。」

瀬里奈さんに話してもらった。

いきなり倒れた僕はすぐに立ち上がったらしい。だが顔付きが変わっていた。

『すまないが、追加ルールを付けてくれないか?』

僕はそういったらしい。アナウンサーさんが許可をだすと僕は追加ルールを注文したらしい。

『相手を氣絶させるもしくは立てなくしたら勝ちにしていいか?』

新しいルールで始まった鬼ゴッコは直ぐに終わつたらしい。・・・
・なぜなら天使が僕の身体を使いついたずらしたからだ。

開始十秒、まず天使は鬼のシスウェルさんの後ろに回り込みあれを揉みまくつたらしい。・・・なにやってんだ。

抵抗出来ず膝がガクガクなつてしまつたシスウェルさんはその後、天使（僕）に足カツクンをされ廊下にダウン。審判が出てきて十秒数えて終了。天使（僕）はそのままぱたりと倒れたらしい。

「時雨君があんな大胆な事するなんて……」

かなり誤解される運命にあるかな？

「だけど私の為に本気出したんでしよう？」

・・・・本気、確かにそうだろ？

一応頷いた。・・・しかしいつこいつに救助班が来ない。

「ねえ、なんで救助班がこないの？」

『救助はセルフサービスですよ。助けてあげたいなら自分で助けてあげてください。』

僕は黙つてシスウェルさんを抱き上げ、瀬里奈さんを背中に装備し、マンションに帰つた。

せめて、管理人さんと瀬里奈さんには天使の事を話しておいたほうがいいだろ？

「あ、試合見てましたよーやりましたね、時雨さん、瀬里奈さん。」

管理人さんははしゃぎながら僕たちを迎えてくれた。

「テレビに最後まで出てましたーかつこいいですね？相手を助けるなんて普通誰もしませんよー。」

「管理人さん。シスウェルさんをベットに寝かしていいですか？後大事な話しがあるんです。」

僕の部屋にシスウェルさんを寝かして、既に床に座つていい一人の元に行く。

「・・・・ 実は僕、二重人格者みたいなものなんです。」

口を開ける二人。当然だらうなあ。だが、僕は話しを続ける。

「片方は戦闘になつたらでてくるんです。・・・つまり、本気をだしたのは彼です！僕は暗い記憶しかないんです。言い訳かもしけないけど信じてほしいんです！」

必死の弁明。二人共頷いてくれた。

「時雨君が嘘つくわけないから信じるよ。」

「そうですね、時雨さんは優しそうな顔をしますからね。・・・・とこりで、先程寝かせたあの人はどうするんですか？」

シスウェルさんはどこか怪我した訳ではなく、氣絶しているだけだから心配することはないかな？

「・・・・ 時雨君、もしかしてさあ、朝言つてた夢に出てきた人はシスウェルの事なのかな？」

黙つて考え事していた瀬里奈さんが僕に聞いてくる。

「はい、地獄で彼女と鬼ゴッコしました。」

頷く瀬里奈さん。一人話しが分かっていない管理人さんに夜の出来事を話した。地獄の事、彼女と命を賭けた鬼ゴッコをした事。「もしかして、彼女は地獄を監視している門番ではないでしょうか？」

そういう管理人さんに頷く瀬里奈さん。

門番・・・・ある使命を守る為に頑張る魔族。住む場所で力が変わり、地獄に住む門番は悪魔並の力をもつ。

うーん、確かに何かの本に書いてあったと思う。

僕の部屋の扉が開き中からシスウェルさんがでてきた。

どのような顔をすればいいのだ？

「あ、おはよー！」

・・・・まずは挨拶からしてみよう。

じーーーーー

うわっかなりこっち見てるよ。穴があくほどみられてる。

「・・・・君って以外に大胆なんですね？」

とうとう触れてきたか。

「誤解です、シスウェルさん！僕は揉みたくて揉んだ訳ではないんです！」

シスウェルさんの顔がしかめつづらになる。

「……私のでは不十分ですか？」

「いえすー。やひついらことー。」

今のは発言は天使であり、ぼくではない。

「そういう意味じゃなくてですね。」

天使が耳打ちする。

「俺が直接みんなに説明するよ。」

ややこしくなるから止めてほしかったが身体が乗っ取られる。

本日一度目のブラックアウトから復帰すると自分のベットに寝ていた。

扉が開き、瀬里奈さんが入ってくる。

「…………あ、起きた？ 時雨君かなり大変な目にあつてるね。」

どうやら天使が僕の過去をばらしたらしい。だが僕にあまり記憶は残っていない。

「…………すいません、瀬里奈さんは僕記憶があまりないんですね。」

「

ビッククリする瀬里奈さん。

「え、嘘…昔の登場人物忘れたの？」

「はい、顔をみればある程度なら分かりますが名前だけではよくわかりません。」

なんとも中途半端な記憶喪失である。
瀬里奈さんは僕に色々試してみた。

「だつちゅーのー。」

「胸ないやつがしたつて一緒にだつー。」

「…………古いですよ瀬里奈さん。」

「じゃ、これは？お帰りなさいませー！」主人様！

ズキン！

・・・・なんだ？」この痛みは？僕は何か知っているのか。

何かが頭の中で繋がり出したがまだもやもやしている。

「時雨さんー本日の料理のお勉強の時間ですよ。」

隣のへやからそんな声が聞こえる。

瀬里奈さんも僕が起きよつとするのを手伝ってくれた。・・・胸

があたつていた事は黙つておひづ。

管理人さんの部屋に入るとシスウェルさんが座つてお茶を飲んでいた。

「・・・天道時君、私は今日からここに門番になります。」

「あ、時雨でいいですよ。へえ、今田から門番ですか。・・・具体的になにするんですか?」

門番だから留守番みたいなものかな?

「・・・住民の安全を守つたりします。」

「ほでいーがーどといつか! 『頑張つてトセー』応援しますよ。」

「ありがと、天・・・いや時雨からそういうわれるとうれしいな。・・・まだ夜の事を覚えているかな?またいつか鬼ゴッコしましようね?」

できれば危険じゃない鬼ゴッコがいいなあ。

今日は包丁の使い方を教わり林檎の皮を剥いた。間違つて僕の指の皮を剥きそうになりヒヤツとした。

部屋に帰り、剥いてきた林檎を瀬里奈さんの前にだしてみた。

「・・・どうかな?」

「うーん、まあ初めてにしてはいいほひじやない？」
そうじつて林檎を口にいれた。

「うふ、おいしい！」

おいしく食べ物を食べた時の瀬里奈さんの顔はかなり可愛くなる。
見とれていたら瀬里奈さんと田があつた。

「…………恥ずかしいから見つめないでよー。」

「すいませんー。つい…………。」

氣まずい雰囲気を破つたのはインターホンだった。僕は玄関の扉を開ける。そこにはどいかであつた氣がする人が立つていた。

「やあー時雨君。久しぶりだね？覚えてているかな、君の親友剣治だよ。」

けんじ？…………？

ペカーン！

記憶のピースがはまる感じがした。

「け、け、け、剣治！何しにきたのー。」

やれやれと首を振る剣治。

「一回選突破を記念して記念品をもつてきただ。…………瀬里奈

姉さんとハーラブだったところを邪魔してすまなかつたね。

「うひつて僕に渡してくれたものは大きな箱だつた。

「剣治、あがらないの？」

僕が尋ねると剣治は頷いた。

「……この部屋にこると色々憑かれそうだからね。

「疲れる？」

「……いや、憑かれる。この部屋には何があるよ。……多分君だけにしかわからないよ。念のため僕はあがらないのか。」

そういうて剣治はくるつと後ろを向き帰ろうとしたが。

「……あ、そうそう。この大会には裏がありそだから気をつけなよ。箱の中身は君を助けるかもしれないものだし、君に襲い掛かるものかもしれない。……パンドラの箱を開けるのは君だから！」

そう言つて帰つていつた。後に残つたのはパンドラの箱とそれを持つた僕であつた。

中に入り扉を閉めよつとして驚いた！ 箱が動いたのだ！

「…………」

開けようかな？

「時雨君ー早く戻つてきなよー誰がきたの？」

瀬里奈さんに呼ばれ僕は箱を抱えて彼女のもとに少し急いで持つていった。

瀬里奈さんに剣治がきたこと、そして剣治がいつた事を話した。

「ふむむ・・・一回選を勝つたから賞品をもつてきただのかあ。・・・

開けてみる?」

開けちゃおうかな?

「・・・瀬里奈さん、中に入ってるの多分生物ですよ。それ動きましたから。」

ゴクリ

「・・・今日はやめようか?」

「・・・そうですね。」

この部屋に何かある事は言わなかつた。剣治が言つには瀬里奈さんには問題ないらしいから。

「・・・じゃあ私はシャワーを浴びてくるよ。時雨君、覗かないでね?」

当たり前のように頷く僕。瀬里奈さんがいなくなり僕一人になつた。(隣では謎の生物が入つているらしいダンボールがあるが・・・)僕は結構気絶していたらしい。すでに外は暗い。・・・シスウェルさんが鬼ゴッコをしに来るかもしれないのに悪いが寝させてもらおう。

少し疲れたな。

ダンボールの隣で寝たのがいけなかつたかな。

・・・・・開けてしまつ夢をみました。

ダンボールの中からでてきたのは軟体動物みたいな生命体・・・。

「ぱーぱー」

「うわあー僕はぱぱじやなーよー」

『時雨君ー時雨君ー』

瀬里奈さんの声が聞こえてくる。

『・・・・起きないわね。じゃあ、王子様がお姫様を起こしてあげましょー』

王子様が？

『んーーーーー。』

そこで夢から覚めた。代わりに田の前に瀬里奈さんの顔が迫ってきているー。

「あのー、起きましたよ?瀬里奈さん。」

田を開け瀬里奈さんは舌打ちをした。

「うひ、おとちよこだつたのこ・・・・眠り薬を買つてこようかな?
?」

…………恐つ。

「それよつ時爾君つなされてたよ。」

「夢を思い出す。かなり恐い物が入っている気がする。
慌てて飛び出してきちゃつた。」

え、ええつ！

「あーしまつた！なこむつけてなー！」

僕は鼻血ぶーでその場にバタンキュー。

「…………やれやれ、この身体で鼻血だすなんて…………。可愛い
つー時爾君。」

夢？の中で僕は天使に説教されていた。

「…………全く！あれほどで鼻血だすなんてなにやつてんだか！」

「…………めんなさい。」

「あんなお子様の身体で氣絶なんて俺は恥ずかしいー。」

「…………すいません。」

「千夏がいたらまずお仕置きはあつただらひつな。」

僕が起きるまで説教は続いた。眼が覚めると明るかつた。

「…………？」

いつかのような重さが僕の上にのっている。またお化けみたいなやつかな？

「…………うーん、時雨君ぶちゅー。」

瀬里奈さんが僕の上に乗っている。あれから瀬里奈さんも眠ったらしい。（身体にはバスタオルが巻かれていた）隣にはダンボールが未だに置いてあり、蓋は閉じたままであった。

「あれっ？」

横隅のほうに小さい字で何か書かれている。

『原点復帰を田指しまして、この中には時雨様が好きな職業をいました。 執事。』

執事？ひつじ？ひつぎ？…………？

天使が笑う。

「なーるほど！俺にはこの中身がわかった！…………やるじゃないか、あの執事さん。時雨！朝起きたら扉の向こうに何がいたかわかるか？執事さんがお前の要望を取り入れた後だ！」

思い出した！じゃあ、まさかこのなかに入ってるのは…………。

僕は固まり、ずっとダンボールを眺めていた。

そのせん サプライズゲストと鼻血ぶー（後書き）

すいません今回かなりみじかかつたようです。さて、今回は時雨君が本気だしました。（天使でしたが。）実は時雨君がやろうとしたら簡単にできるんですよ。そして最後にでてきたダンボール！昔の見てたら何が入ってるかわかると思いますーこれからも応援よろしくおねがいします。

そのよん 愛、鉄分と朝食の関係。元気だん！

セヒ、中に入っているのはなんだらうな？

「『』まかすな。お前は何が入っているかわかっているんだらう？』

剣治から渡された箱。

「・・・天使、聞きたい事があるんだ。」

しかしあえて今回は話をかえたいと思つ。

「なんだ？」

「契約は別に・・・その、あれだよ。ブチューでしなくていいんだよね？」

「うーん、と唸りながら頷く天使。（やつた一箱の話しからそらすこと）に成功したみたいだ！」

「・・・そうだな。今のお前なら・・・契約する時は紙で大丈夫だが・・・出来れば相手と何かしら触れたほうがいいな。」

話しの内容は適当である。悪いがこれは囮作戦、天使が箱から興味を無くしてくれれば大成功！

「へーっ、じゃあやつぱりその・・・あれは一応したほうがいいのかな？」

「出来ればな・・・うーん、なんか話してたら眠くなつたな。」

天使は静かに姿を消し、残つたのはガツツポーズの僕と箱、そして僕にしがみついている瀬里奈さんだけである。

時間帯は早朝。僕は朝の空気が吸いたくなつたので外に出て散歩に行くことにした。

静かな一人街を歩く僕。始めは快調だった足も今は重い。

・・・・・見られている気がしてならない。

今は高いビルの上から僕を見ている。飛んで確認すればいいが、間違いだつたら相手にわるい。それにもうすぐマンションだから僕が我慢すればいいのだ。

気配が僕の後ろに回る。

「?・・・・!?

気配が今度は前に行く。目の前に現れたのは敵対心剥き出しの大きな竜だった。

「僕にはムツゴ ウさんみたいにどんな動物とも仲良くなる自信はないよ。」

竜に説得を試みる。そして竜に言葉が通じるか謎だ。・・・・・ 文字を書いて渡したら解るかもしねない。

竜は僕の身長の一倍ぐらいだ。色は青い。

「・・・・うーん、しあづがないな。」

無駄な戦闘はしたくないし竜と戦いたくもない。もしかしたら誰かの竜が逃げ出したのかもしれない。

『私は、悲しみを背負い込みし天使。』

僕に紅い羽が生える。

歩いて散歩したかつたがゼリヤリお空の散歩になりそうだ。襲いかかる竜を避け、空に羽ばたく。

「悪いけど飼い主ちゃんと遊んでくれないかな? そろそろ瀬里奈ちゃんが起きるから。」

竜は背中に生えていた羽を使い空に舞、僕をおつかけてきた。
「鬼ゴッコか。悪いけど君に構つてゐる暇はないんだよ? 賴むからまあ。」

「あしゃあああー汽車ああああー!」

・・・今、汽車といったような? 気のせいかな?

「とにかく、また今度遊んでもらうからね?」

以前追い掛けてくる。

「・・・・・しあがないな。悪いけど眠つてもうおつかな?」

光剣を召喚し、襲い掛かる竜にみねうちを叫ぶ。

「いやー。」

「あしゃー。」

竜が墜落するのを受け止め、近くの広い場所に置いてあげる。

「…………」めんね、お詫びに林檎を置いとくから食べてね？」

管理人さんに練習用に渡された林檎を竜の鱗に置く。

「じゃまたね？」

僕はマンションに向かい飛び立つのであった。

瀬里奈さんが手を振りながら僕に何かいつていてる。

「おはよー時雨君！ 昨日はよく眠れたかなあ？」（この言葉の裏には私の身体を見たぐらいで鼻血ぶーなんて……）ハッシュな時雨君。とこつ意味が含まれている。（）

「昨日は夢の中で天使に説教された夢を見ました。」

ふーん、と口からなんとなく不満げな声が出される瀬里奈さんだつた。

部屋の中は美味しそうな臭いがしていた。

「……実はあさりはんつくなんだ！」

へえー瀬里奈さんが？

「じゃあ遠慮なくいただきますね？」

まずはみそ汁に手をつける。……？ 鉄の味がするような気がする。

「？鉄分の味がするよつな・・・・」

「あはははっ！貧血起きたないよつに鉄分いれたんだ！」

へえー成る程

僕が帰つてくる前、瀬里奈さんは田を覚まし僕がいない事に気が付く。僕が床に残して行つた手紙を見て、決心をする。

『散歩に行つてきます。帰つて来たら朝食を作りますからゆつくりしてていいですよ。』 時雨

「・・・時雨君がいないから私が朝食を作らうー。」

無論彼女が料理をしたことは皆無であり、それからは血の記憶となり彼女はその事を忘れる事はないと思つ。

みそ汁

「いたつー血がみそ汁に沢山入つていつちやつた！・・・ばれな
いよね？」

田玉焼き

「またやつちやつた！黄色と白と赤が混じつちやつた・・・うん、
綺麗だからいいよね？」

そんな事があつたのだ。

「瀬里奈さん、顔青いよ？・・・大丈夫？」

あれだけ血を流したのだから青い顔になるのは当然である。（しかし、どうやつたら目玉焼きで血をながすのだろう？）

「う、うん。少し疲れたかな？今日は私達じゃないからゆっくり寝てるね？」

そういうて瀬里奈さんは部屋に戻つて行つた。

一人になり暇になつた僕は先程置き去りにしてきた竜を思い出した。

「……ちょっとやりすぎたかな？」

外に出ようとしたらインターホンがなつた。

ピンポーン！

「あ、はい！今行きます！」

扉を開けるとそこには青い布をまとつた一人の少女が立つていた。

「あの～どちら様ですか？」

「ふん、朝貴様に気絶させられた竜だ！貴様に仕返しにやつてきた！」

竜の仇返し。

「あ、なんだ！……人間の格好してますか？」

見た目美人、肌も透き通るぐらい白い。髪はあの竜の肌と同じくらい青いし、腰の部分まで伸びている。そしてこっちであつた女人のなかで一番目にあがでかい。（一番は管理人さんである。）

「貴様！どこ見てるー！」

はつーしまつたばれた！

「…………とにかく！今すぐ私と一緒に来い！決着を付けるぞ！先程は手加減などしあつて！」

僕は竜の彼女に連れ去られ大会本部の地下に連れてこられた。

「……行くぞ！本氣でこい！」

悪いが僕には戦う理由はない。話しを聞くかぎり多分僕が悪い。
「…………あの、朝はゴメン！急いでたからさつい…………帰つていいかな？」

「貴様は何故本気をださない？昨日見ていたぞ？あれも手加減していたな？貴様は帰つていいい訳がないだろ？」

天使が現れ、僕に交代するようにもちかける。

「時雨、あの竜は本気だ。多分、お前をバーベキューにしてぱくつと食べてしまつにちがいない。…………今すぐ俺と変われ、いや変わらせてもらおうか？」

僕には抵抗する力無く身体を乗つとられた。だが、いつもと違い意識はなくならなかつた。

『じゃあ始めよつか？』

「やつとまともな顔になつたな、いいだらつー。」

竜さん（仮名）はどこからか竜の鋭い羽を出し田の前に構えた。
すると羽は大きな斧になつた。

「・・・貴様はあの武器を出さないのか?」

『・・・ルールを決めていいか?』

相手の質問に答えずに天使はルールを決める気だ。

『お前は俺を倒せばいい。だが俺はお前を倒さない。』

「また手加減か?」

『いいや、違つ!・・・・・俺の剣がお前の頭に当たつたら俺の勝ちでいいだろ!う~』

天使はそういうて右腕に光る何かを召喚させる。

(は、ハリセン!)

神々しい程に光るハリセン。

『・・・それでは始めよつか?』

両者一緒に動いたと思ったら次の瞬間にはハリセンが竜さんの頭にヒット!

すぱああん

『俺の勝ちだな。』

うーん、もうちょっと苦戦してもいいんじゃないかな?

「…………これが貴様の本氣か……。」

竜さんは片膝を地面につけ泣いていた。

「……やはり姉様が負ける程はある。」

僕の知り合いに竜の知り合いはない。

「煮るなり焼くなり好きにしろ。」

『だそりだ。時雨後はお前が決める。』

身体が僕の言つ事を聞いてくれるようになつた。

竜さんは僕を潤んだ瞳で見つめている。

「……えー、ゴホン。貴方はなんで僕を狙ったんですか？」

「……貴様が大会に出ているから再起出来ないようじょうと
しただけだ。」

物騒な話だなあ。

「そういうえば林檎食べましたか？」

「……まあ、一応はな。礼を言つ、ありがとう。」

さて、聞きたい事はもつないからなあ。

「じゃあ僕は帰りますね？大会頑張ってください。」

帰ろうとすると服の裾を掴まれた。

「ま、待て！まだ貴様は私に何もしてないではないか！」

「え？ちゃんととしたじゃないですか？質問に答えてもらひたし林檎のお礼もしてくれました。」

再度帰ろうとしたが結果は同じだった。

「ま、待て！普通何か無理な事を命令するだろひ？」「いや、言つてゐるみがサッパリわかりませんな。
「・・・・何言つてゐんですか？」

「ひひと唸る竜さん。

「ほひー！身体で働いてもらひうとか、後は・・・」

なんだこの人？

「竜族は倒された相手の言ひ事聞かないといけないのだ。」

はつきつて迷惑である。いふなつたら逃げよう。

「あ、あんなどひう・・・・・」

竜の氣を引きやうな物はなんだろひ？

「何がが飛んでるー！」

「え？」

振り向く竜さんを置き去りにして走りだす僕。かなり本気で走ります！もう少しで建物から出る事が出来る！

出口が何か黒い影が塞いでしまった。

「ぐ、やはり何かじや駄目だったか。」

「さあー私に何か命令しろ！」

影の竜さんはまたもやうすげる。いつなつたら適当に命令しようと！

「・・・これから好きなように動いて結構だよー。」

「」の命令完璧だ！・・・しかしこれは大変な間違いであった。

「・・・それではいまから自由に動かせてもらひ。」
近付く竜さん。

「貴様の名前は何と言つへ？」

「時雨だよ？名字は天道時。」

「さうかでは今日から私は時雨殿を護る影になひ。」

竜さんが？さうこつて竜さんは消えてしまった。まるで忍者だ。

「・・・帰つてお風呂こまつりつかな？」

湯舟に浸かる。疲れがなくなつていくようだ。まだ時間帯は早いのだがさつきから身体を動かしてばかりなので汗をかいてしまった。

「……身体を洗おうかな？」

ザバア。

「きやあー！」

上から声が聞こえる。

「……なんで貴女がいるんですか？」

天井にくついている竜さんを見つめる。

「……それは……時雨殿を護る為に……」

「……いえ、結構です。貴方は帰つていいですよ。」

「……で帰さないと僕は毎口の人に見られている生活を送る事になるだろう。」

「だいたい、浴室で服着たら濡れますよ！直ちに家に戻りその服を乾かしてくださいー！」

「……わかった。」

渋々出ていく竜さん。

「……はあ。」

ガチャ。

「時雨殿…ちやんと服は脱いで来たぞ…」

「タオルで隠してはこるが焦る…」

「やつこいつ事じやなくてさ…」

「成る程、タオルも取れとこいつとか…」

タオルを剥いどりする龍さんを黙って止めた僕は諦めた。

「・・・冷えますから湯舟に浸かって下せこ。」

「」の浴槽は狭いので僕は只今身体を洗つてこる。

「時雨殿…私が洗いましょうか?」

「・・・いえ、結構ですよ。」

世の中わからないものだ。さつきまで本気で戦つていたのに今は全く違う。そういうえば龍さんの名前を知らないな。

「せうこんばん貴女の名前はなんですか?」

笑う龍さん。

「影にて前まわつませんよ。」

「うーむ、どうかで聞いた台詞だなあ。

「・・・じやあなんて言つたらいいんですか?」

「影とでも読んでくれ。時雨殿。」

ふーむ？困ったな知無じさんか。

「じゃあ・・・シャドさんでいいかな？」

無論彼女が忍者みたいだからである。

「時雨殿が良ければ私は別にいいよ。」

お風呂から出るとシャドさんはいなくなつた。忍者なんだろ？
あ。朝襲われた時も凄かつたし、竜みたいな形と人間になれるし。
うーん、僕は紅い羽を生やすのが精一杯のようだ。

箱とテレビが置かれている部屋に行くと驚愕の出来事がそこには
らがっていた。

「は、箱が開いてる！？」

ダンボールはパックカリ蓋を開けており、中身は消えている。

・・・何処だ！中に入っていたはずのメイドは何処にいった？

いたーつ！冷蔵庫漁つてる！

「・・・あの、すいませんー眠つて下せーつー

ボカリ！

不意打ちで悪いがメイドさんを氣絶させダンボールに詰める。

「シャドさん！」

「なんだ？」

「今すぐこのダンボールを宅急便で人間界に送つて欲しいんだよ！」

宛先は霜崎剣治。

「わかった。」

ダンボールを持ち、静かに消えるシャドさん。竜なのに忍者みたいな人である。

「時雨いいのか返して？」

「・・・うん、いいよ。」

未練がないと言つたら嘘になるが今はメイドさんは要らない。
「かわつたな。お前は自分で立とうとしている。」

昔はメイドさんには世話をもらつた気がする。

「変わつてないよ。」

僕はテレビを眺めながら色々と考えたが瀬里奈さんがなかなか出てこないので様子を身に行つた。

「大丈夫ですか？瀬里奈さん。」

「うーん、大丈夫だよ。」

ベットに寝ているのは瀬里奈さんではなかつた。まず身長が高い。
そして首の下辺りが瀬里奈さんより膨らんでいるのだ。

「・・・貴女は誰ですか？」

「ははっ…何言つてゐの？時雨君、私よ瀬里奈。」

「嘘つかないでトセー！瀬里奈さんはそんなに胸ないです…」
固まる瀬里奈さん？

「…しまつた！寝言で天使化しちゃつたか。」

白い羽が生えている事に気が付いたが白い羽は消えてしまつた。
そしてベットの上には瀬里奈さんが乗つてゐる。

「「めんね、時雨君。びっくりさせたかな？」

「…・・・・はい。」

瀬里奈さんはかなり強い天使らしい。だが、力が強いので普段は
力を抑えて生活してゐるそうだ。

「だから本当の姿はあつちなのよ。・・・・ふふつ、大きかつたか
な？」

うーん、確かに大きかつたなあ。

雑談をしてゐるとシャドさんが戻つてきた。

「始末は終わつたぞ。」

そういつて静かに消えるシャドさん。

「…・時雨君、まさか忍竜なんか飼つてるの？」

忍竜？

「忍竜とはなんですか？」

「忍者みたいな竜よ。竜は一般的に大きくなつたら人間みたいになるの、ちなみに好きな食べ物は林檎よ。林檎を『えるとなつくし、情けをかけられたら情けをかけてくれた人の命令を聞くの。』

厄介な人を連れ込んだなあ。

「時雨君、あまり野良は拾つてこないでね？」

・・・・前にもそんな事言われた気がする。
テレビでは大会の事を言つていいよつだ。

『・・・・今回のゲストはハヂスさんです。ハヂスさん、よろしく
お願ひします。』

『おにーちゃん!見てる?ハヂスだよつー!』

『・・・・それでは昨日の試合を見てみましょーー一番凄かつた
のはやはり時雨選手ですね?倒れた相手を助ける心を持つています
から。』

『優しいからね!私がおにーちゃんを襲つた事があつたけどその後
私を家に泊めてくれたんだよ。』

『・・・・優しいんですね。今度私も泊まろうかな?』

「・・・・時雨君、当然あの子とは別の部屋で寝たわよね?」

「ーーん、少し記憶が曖昧なんだよなあ。

「・・・・いや、一緒に寝たと思うよ?」

『やつたらハーフちゃんね、私を『ペ――――』してねそれから
『ペ――――』をしてたの。』

「……時雨君、それは本当かな？」

間違いなくそんな事した記憶は全くない。

「いや、そんな事した記憶はないですよ。」

「……嘘でしょ？ ハテスさん』

『嘘ですかーおひやんはそんな強引な事しません。』

『時雨選手の嫌いな物はなんですか？』

「これでは僕の番組みたいだな。

『嘘が嫌いです。』

『……ハテスさん、貴女はつき嘘つきましたね？』

『あわわわわわっ！ おこーちやんじめんなさい。』

「……ふ、やまあみなさい。」

そして、それから僕の個人情報はどうぞん魔界のお茶のまになが
されていった。

そのよん 愛、鉄分と朝食の関係。なんなん！（後書き）

まあ、最近時雨君をボケから突っ込みにしたい気がします。剣治が消えてしまったので誰も止めてくれる人がおりません。さて、今回は時雨君が戦う事が多かつたですね。そして箱が開いてしまいましたが時雨君は送り返しました。変わりましたね。この場を借りて評価してくださってありがとうございます。

「あの」こたつて平穏な一日。

テレビの内容は次の試合の選手の名前を告げた。

「時雨君また私達だよ。」

「そうですね、まあ、仕方ないですよ。僕たちの相手はさうやうシヤドさんみたいですよ。」

名無しの影と対戦相手の名前欄に書かれている。

大会本部

『ああ、一回戦始まりましたー! 今回のお題は歴史ですー! 選手の方は今すぐ校舎にこってくださいー!』

歴史かあ。シャドさんなんか得意そつな顔してるとなあ。

「瀬里奈さん、歴史得意ですか?」

「うーん、普通かな?」

ちなみに僕は得意科目の一つである。
僕たちの座っている机に紙が渡される。

『・・・それでは始めて下さい。時間は50分です。』

えーと、なにに？『第一問、ガンダは何を参考にして作られたか』。

この問題難しいな。近くを見ると残りの一人は頭を抱えていた。
・・当然だろう。

答えは『ザ』かな？

その後もかなり難しい歴史の問題は続き、残りの一人は頭を押されて必死に頑張っていた。

「・・・どうだつた、瀬里奈さん、シャドさん。」

暗い顔つきの一人。

「サッパリわからなかつた。一番わからなかつたのはブライが戦艦の指揮をとつたのは何歳かだ。絵がかなりふけてたから30歳と書いた。」

「うーん、私も全くわからなかつたなあ。シーアの異名はなんですか？がわからなかつたなあ。」

後は結果を待つだけだなあ。僕たち一人だから平均点数になるみたいだな。

『それでは一結果発表をしたいと思います！』

シャドさんはこつちに来てこついつた。

「・・・時雨殿。」これがおわったらいひとつ付けてくれないか
? 買い物がしたいんだ。」

もはやどうでもここのかな?

『・・・瀬里奈選手、0 手無し選手 0 時雨選手 4

9 です。結果勝利者は瀬里奈選手です。』

「シャドさん、もう未練ないの?」

笑いながら頷くシャドさんの顔は幼い顔だった。

「ああ、いいんだ。影の私がみんなのトップに立つても無理だ、それには護るべき時雨殿がいるからな。・・・私は時雨殿より弱いからな。あまり役に立つ事はないだろうがな、だから私は時雨殿の世話をすることにしたのだ。」

「ーん、清々しい笑顔だなあ。

「・・・ちよっと、時雨君。馬みたいな顔になつてるよー。
はーーしまつた!」

「今回まーこもんー後で見てなさい、時雨君。」

そうこうして帰ってしまった瀬里奈さん。

「あー、それでも起き合つてもいいだべー。」

僕の腕を強引に取り、歩き出す。

「シャドさんー柔らかい何かが腕に当たつてゐるー。」

シャドさんをみたらびっくりした。

すーっと笑つてこりのだ。

「や、いくぞ時雨殿。」

その後、街でデートになつたのは間違いない。

もう少しで家につくときシャドさんは話しあつた。

「・・・何故、時雨殿を狙つた本当の理由をこつてなかつたな。」

「本当の・・・理由?」

静かに話しあつシャドさん。

「私の家族がある人物から命令を受けた。・・・夜中奇襲をかけたらあつさり負けてしまつた。その人物はな、私の家族を逃がしたそうだ。『この時雨に勝ちたいならもつと強い奴をよこせばよかつたな!–ぺったんが相手では面白くないわよ?』とまで言つたのだ。」

・・・それは間違いなく千夏姉さんだな。

「シャドさん、じめんね。」

一応謝ひつ。

「ふふつ。別にいい。」

真剣な顔になるシャドさん。

「・・・私を貴方の影にして欲しい。」

「…………その、なんでもするからな。時雨殿が望むならな。」

「…………じゃあシヤドさん、これからもよひじへね。」

「あいつと戻るへんなシヤドさん。」

「ここのかー私は時雨殿を襲つたのだぞ。」

「じやあなんで僕の影をやつしたの?。」

「あれはお試し期間だ。」

「知りなかつたな。」

「時雨殿がいいなら契りを結ぼう。」

「…………？」

「わかんないからシヤドさんがやつてくれるかな?」
顔が赤いシヤドさん。

「あ、そつか。まずは目を開じて欲しい。」

「…………？」

「くつくつく、時雨。よかつたな?。」

「じつこつ意味かな?」

「…………それでは行く?。」

「…………んんっー。」

シャドさんが僕を抱きしめてくれる。

「時雨はよくやるよ、紙でもいこのにな。」

田を開けるとシャドさんは消えていた。

「あれ?」

「奴は影だろ? 影は主人を護るものだ。名前を呼べば出でてくれるさ。」

成る程、知らなかつたなあ。

家に帰るとあの瀬里奈さんが「王立ちで僕の帰りを待つていた。

「あ、ただいま瀬里奈さん。どうしたの天使化なんてしちゃつて。」

身長は高くなり整つた顔は妖しく笑つている。

「・・・これなら時雨君も文句ないでしょ? あの忍者並に胸あるんだからさー!」

「な、何言つてるんですか! 瀬里奈さん。」

「やりと笑う瀬里奈さんは怖い。例えるなら死神が笑いながら将棋をしているぐらい怖い。(意味がわからないな。)

「・・・さつき忍者とキスしてたでしょ?」

「ーん、確かにしたような気がする。

「・・・私が近くに一番居るのに時雨君は新しく出でてくる女の子とばかりキスしてさあ！今日は許さないから！」
せ、瀬里奈さんの身体から怒りのオーラが湧き出でるー。

「・・・覚悟なさい！時雨君。」

「話を聞いて下さー！瀬里奈さん！」

瀬里奈さんに玄関で押し倒された。

ピンポーン！ガチャ。

「やあ、時雨君。」この時間からいちゃいちゃかい？相手は誰かな？。
・・天使化した瀬里奈姉さんか。」

そういうて扉を閉じた剣治。

「終わつたら言つてくれ。」

止まつていた時間が動き出す。

「落ち着いて下さいー！」

「問答無用ー！」

シャドさんは助けに来てくれなかつた。

『我と契約し罪人よ！契約を破る事があれば罪人を更に紅く染めよ

！』

「・・・んんーん！」

その頃、外にいた剣治は。

「やれやれ、時雨君は女難だなあ。」

「さて、契約したからこれから時雨君は他の女の子と契約したら羽が更に紅くなるわよ？」

天使化を解いた瀬里奈さんは・・・大人のままだつた。

「な、なんで幼くならないんですか？」

「おいおい、突っ込む所は違う所だぞ？」

天使がそう言つが僕にはそつちのほつが気になつた。

「・・・うふふ、誰かと契約したら力が安定するんだ！だからこれからはずっとこの身体でいれるんだ。

「小さいほうがよかつたな。（ぼそつ）」

「ヤリと笑う瀬里奈さん。

「大丈夫、いつでも小さくなれるからね？・・・時雨君て小さい子がいいんだ？」

「いえ、そういう事じゃないんですよ。」

ギヤーギヤーと騒いでいると剣治が入つて來た。

「さて、中で話しあしよつかな？一人共。」

「時雨君、君は箱を送り返してきたね？あれはなんでかなー。」

何となく怒つているような剣治をみるのは初めてだ。

「僕は少しだけでいいから自分の足で立ちたいんだ！」

ふつと笑う剣治。

「そうか、じゃあ一緒に来てくれ。瀬里奈姉さんはそこまでしてくれ。」

剣治に連れられ外にでる。

「・・・時雨君は捨てられたメイドがどうなるか知ってるかな？」

「うーん、わからないな。」

剣治が指差す方向をみてびっくりした。

「・・・野良メイドになるんだ。」

箱に入り

「拾つて下さい」

と叫んでいる。誰も見てないと知るとダンボールからでてきた。そしてダンボールの中から何かを取り出し変装する。

「・・・泥棒になつた。」

みんなに怪しい人がいる。

「さて、時雨君はいつからそんなに心が荒んでしまったのかな？」

メイドさんを見てこると心が痛む。

「ぐ、わかつたよー説得してくればいいんだよね？」

僕は見るからに怪しい人物に話し掛けた。

「あのう、すいません。」

びくつく泥棒。

「なんですか貴方は？警察さんですか？私はまだ何も盗つてないから捕まる事は出来ませんよー今からあのマンションの部屋に忍び込もうとしてるだけですー！」

指差す方向には僕と瀬里奈さんが住んでいる部屋があつた。

「・・・なんでそんな事をする予定なんですか？」

「実は食べ物を探していたら後ろからガソリンとされて記憶が無くなつたみたいなんです。生きる為にはもうこれしかないんですよー！」

犯人は間違なく僕だ。

「・・・わかりました。僕の住んでこられる所に来てお手伝いさんになつてください。」

「いいんですか？」

・・・悪いのは僕だ。

「はい、いいんです。」

瀬里奈さんが僕を串刺しこじみとしなければいいんだけどなあ。

剣治は手を振り帰つて行つた。

僕も覚悟を決めて部屋に帰る。

「た、ただいま瀬里奈さん。」

「失礼します。」

「ひえっ！瀬里奈さん！危ないですから手に持つていい大きな包丁

を下ろしてくださいね。」

「…………時雨君、少し話しがあるわ。ちょっと来てくれないかな？」

串刺し所がミンチになりそうだな。

「なんだー！そりだつたの？」

瀬里奈さんを納得させる事に成功！明日も僕は元気に生きる事が出来そうだ。

「じゃああのメイド名前は何で言つの？」

メイドは困った顔になり知らなことを告げた。

「…………わからません、私記憶がないから……」

「…………じゃあ名前を考えるわね？そりゃ、メイってどうかな？」

「…………」

メイドのメイ?かなり適当じゃないかな?

「・・・メイ、いい名前ですね。」

これで決定してしまった。

メイさんは背の高い瀬里奈さんと同じくらい高い。あれは瀬里奈さんに負けるだろ?。髪はボーテールである。

「・・・はあ、まあいいかな?」

部屋は残っていた部屋を使つてもらうこととした。

しかし問題がひとつある。メイさんに払える給料はないのだ!

「・・・あの、メイさん。悪いけど給料払えないんです。」

「結構です。拾つてもらつたからそれだけで十分うれしいんです。」
「・・・すいません。」

そして夜。自分のベットに寝転がりぼーっとしていたら何かがふつてきた。

「うわっ!なんだシャドさんか。」

シャドさんは僕に頭を下げた。

「・・・すまん、時雨殿。あれからゴンベーに行っていたのだ。」

だから助けてくれなかつたのか。

「・・・なんですか？」

むじむじするシャドさん。

「・・・私は、その、始めてあんな事したから・・・・・恥ずかしくなつたから・・・。」

成る程、恥ずかしかつたからいなくなつたのか。

シャドさんは僕の隣で寝転がり始めた。

「シャドさん。な、何やつてゐるの？」

赤くななるシャドさん。

「これも時雨殿を護る為だ。・・・・・ただ一緒に寝たこと思つた訳ではない。それに・・・その、時雨殿があれを望むなら・・・・

話しがおかしいまづて向かつてこる一何とかせねばー

「あははっーちよつとトイケ行つてくるよ。」

危なかつた。あのままこつてたうびつなる事か・・・・・。

深呼吸してまた部屋に入る。

「・・・スースー。」

あれ?シャドさん寝てる?

「時雨、早く寝よ。」

天使が耳元で囁く。なぜかその声は面白そつである。

「……うん、わかった。」

シャドさんの隣に寝た。近くにはシャドさんの顔がある。……
気が変になりそうだ。

突然、部屋の扉が開いた。

瀬里奈さんが身体から凄いオーラを出してくる。

「……時雨君、一緒に寝ない？ ゆっくり寝れるわよ。そしてず
ーっとね。」

僕は震えながら首を横に振った。

「い、いえ！ 大丈夫です！ 僕もつ高校生だから一人で寝れます。」

瀬里奈さんは僕の隣を指差した。

「……じゃあこれはなにかなあ？」

言ひて訳も出来ない。

「あわわっ！」

「ひひひひひっ！」

僕は瀬里奈さんに連れ去られた後、彼女のベッドに押し倒された。

もはや瀬里奈さんではないような気がしております。

・・・・嫌な夢を見たなあ。瀬里奈さんに襲われる夢だ。

隣ではシャドさんが寝息をたてながら横たわっている。服がまだ
はぐらかれていた。

「おはよー時雨殿。よく起れたかなあ?」

瀬里奈さんが入ってきた!急いで布団を被せて隠す。

「ああああ。おせよいじめますー。」

「へへん、おはよー。朝食が出来たらしごから早く来てね?」

やけにひいて部屋を出でこく瀬里奈さん。・・・・・危なかつた。

「・・・・・うーん。」

布団からシャドさんがはこ出でてくる。

「・・・・・・シャドさん、早く服をきりこと着てください。」

「わかった。時雨殿ー。」

服をきりこと着たシャドさんは泣いてしまった。後で何か食べて
もらひおひ。

今日は大会がなく、一日自由があるので料理の勉強をした。管理人さんのところに向かう。

「あ、時雨さん。料理の勉強に来たんですか？」

「はい、お願ひします。」

中にはシスウェルさんが何かしていた。（管理人さんと一緒に住んでいるようだ。）

「編み物ですか？」

頷くシスウェルさん。赤い毛糸で長い何かを作っている。多分マフラーである。

「時雨の首を絞めようと思つて作つているのー。」

それはそれはかなり物騒な編み物ですね。

そして今日はフライパンの使い方を習つた。

いたつて平穏な一日であった。

そして夕方。シャドさんと共に買い物に行く。（お金は大会本部から送られてきた。）

「うーん、シャドさん何か食べたいものあるかな？」
静かに隣に現れ返事をする。

「時雨殿、私は林檎が食べたい。」

林檎？

「わかったよ。じゃあ持つてきてほしいな。」

「わかった。」

消えてしまつたシャドさんの帰りを待つていると、軽くて黒い帽子（魔法使いがかぶるような奴）を被つた人がこっちにやってきた。普段から見ているが、その人は僕を見ている。

「……あのう、僕に何かよろですか？」

微笑む謎の魔法使い。

「これは失礼。ふふっ、なかなか美味しそうな身体ですね？……冗談です。私の名前はイクス・リベナ・マッカローと申します。以後おみしりを……時雨さん？」

「はあ、よろしく。」

イクスなんたらーマカローさんはそつにっこりどこかに行ってしまった。

「とうとう魔女が出てきたか。そろそろファンタジーに変わつたらどうだ？」

「天使、今日はマカローを買つて帰ろう。」

「時雨殿、林檎を持つてきましたぞ！」

「シャドさん、何もワゴンないと持つて帰つてもいいと想つよ。」

「そ、そつか？じゃあ返してくる。」

まだ、これからも何かが起こるかも知れないな。

その」いたつて平穏な一日。（後書き）

今回は大体キャラが出揃つた感じに仕上りました。

やのわく 真面目な時雨！

今日の晩御飯はマカロニーの入ったスープである。（ちなみにシャドさんは林檎を沢山食べている。）

「・・・へえ、やっぱりメイさんは料理がうまいですね。」

食べながら感想を口にだす。

「ありがとうござりますー時雨様にかっこいいもんとつれしいです。」

そういえばマカロニーを食べて思い出した。

「誰かえーっとなんて名前だつたかな？イクス・・・・なんとかマカロニって名前の魔法使い知つている人いるかな？」

天使が僕に話し掛け、訂正を促す。

「イクス・リベナ・マッカローにだーお前だつてじあめとか呼ばれたら嫌だろ？」「..」

確かに嫌である。

「じゃなかつた。イクス・リベナ・マッカローにだつた。」

瀬里奈さん、シャドさん、そしてメイさんが頭をひねる。

「うーん、知らないなあ。」

「私も知らないな。」

「私は記憶がないのでサッパリですね。」

ピンポーン！

誰か来たみたいだ。メイさんが走つて行き帰つてきた。
「剣治さんと申す人が時雨様にようがあるそいつです。・・・・・どう
しますか？居留守を使いますか？」

「いや、いいよ。じゃあちよつと行つてくるね。」

「コップに入つていた飲み物を少し飲み、僕は剣治に会いに席を立
つた。

「・・・私は喉がかわいたな。少し飲み物がのみたいから何かくれ
ないか？」

「すいません、いまちょうど切らしたところです。」

「え、私も何かのみみたいなあ。もう残つてないの？・・・・・あ！シ
ヤドあんた時雨君の飲もうとしてない？」

「別にいいだろ？時雨殿はまだ帰つてきてないからな。それに時
雨殿は優しいからそのぐらいで怒るはずがないだろ？に？」

「時雨君に甘えないでよー。彼は私の物よー。」

ギャー、ギャー！

僕は外に出て剣治に会つた。

「……時雨君、どうやら君は魔法使いに会つたみたいだね？」

「うん、なんか『私は偉いぞ』オーラが身体から滲み出でていた気がしたよ。」

うんうん頷く剣治。

「イクスはお高いところがあるからね、彼女は魔法使いの中でも屈指の実力を持つていてるんだ。大会優勝候補の一人だよ。マダンも使えるそうだ。彼女は異名をもつてのさ。」

「異名だつて？」

「ああ、『五月雨の蒼い月』といつ異名だ。」

「……無駄に長くないかな？」

剣治は最後に僕に注意した。

「……彼女を必ず立ち直れない程ボコボコにしてくれ！絶対だぞ？もし守れないなら人間界を潰してナマコの世界にするからな！」

「なんでそんなに怒ってるの？」

かなり珍しい現象である。剣治は普段かなり冷静だし、隠れた優しさを持っている。

「……彼女の為だ。少しお高くとまつすぎだ。ナマコ世界にした

後は大罪人になつてでも彼女をこの世から葬り去るー。」

「・・・お化けになつたら?」

「念佛唱えて消えてもうつ!奴は一度心に傷をおつべきだー。」

そういうて走り去つた。

部屋の中ではまだ乱闘が続いていた。

「・・・よししなさいよーそれは私が飲むのー。」

「嫌だ。時雨殿の湯飲みは私のものだ。」

「あわわわわっ!」

部屋の中は戦場だ!本やら包丁が飛び交つている。

「ちょっと二人共やめてください!時雨様が固まつてますよ?」

僕は何となく穴があつたら隠れたいなあと思つた。

戦場は散らかっている。

「し、時雨君これは誤解よ?飲み物を争つてたの!」

「そ、そうだ!飲み物が無くなつてたから争つてたんだ!」

僕は溜息を出してもう一度外に出ることを決意した。

「・・・メイさん僕、飲み物買つてくるよ。帰つて来る前に出来れば片付けといてほしんだけど?」

「はい!時雨様、まかせてください!私は貴方のメイドだから頑張ります!」

僕は早速飲み物を探しに旅に出るのであつた。

「メイー！あんた何時雨君に色めき立つてんのー。」

「やうだー何してんだ！」

「誤解ですよー！ただ一人より頼りにされているだけですー。」

ギヤー、ギヤー、ギヤー！ 夜道を一人歩いていると声がした。

「お一人で夜道を歩くと危険ですよ？ 時雨さん？」

声の主は空にいた。

「あ、イクス・リベナ・マッカローー！ あー。」

まっさきに乗つて僕を見ている。その、スカートが風で動くたびに・
・白いパンツが見える。それに気が付いたみたいでおりてきた。

「……ビー見てんですか？」

「……その、何となく。」

ふん、と鼻を鳴らし僕に告げる。

「まあ、いいでしょ。貴方達の今度の相手は私です。まあ勝つ事
は出来ないでしょ。けど頑張って下さこね？」

おーほつほつほつほつほつほつほつほ

疲れないんだろうか？

ほつほつほまあ。

やつぱり疲れるだらうな。

「・・・あの、何か飲みます? ジュースぐらいならおいでれますよ?」
「・・・まあ、貴方がどうしてもうていうならもうてあげましょ
う。」

声がかれている。

僕は近くにある自販機でジュースを買いに行つた。
・・・・あの人はどうじゅうが好きなんだらう?えーい、直感
を信じよう!

僕は目を閉じた。

・・・・・見えるつーそこおー!

ピッ!

ガタン!

出できたジュースはレモンジュースであった。

取り出したらもう一つでてきた。

「・・・?なんでだるつ?」

「オレの奢りだ。兄ちゃん、頑張りなよ? 彼女が待ってるぜ。」

いきなり自販機が喋りだした？

「はあ、ありがとうござります。」

「ふ、遠慮はいらねえな。人呼んで、浜辺の切腹だぜ？覚えたときな。

「一礼してイクスさんのもとに行く。

「はい、イクスさん！」

「イクス様とおよびなさい。」

「はいはい、わかりましたイクス様。（やれやれ。）」

「はいは一回。」

「はい。」

イクスさんは少し浮いたほつきに腰掛け飲み始めた。

「・・・私の好みを知っていたのか？」

どうやらレモンが好きらしい。上機嫌である。

「・・・ははっ。」

「時雨さんもレモンがお好きで？」

お高い雰囲気はなくなつていた。

「まあ、大好きだよ。」

「そう、ありがたく思って、お礼を言つてあげますわ。」

「素直じゃない人である。

「はい、ありがたい幸せです。」

「ふふっ。ありがとう。」

「そういえばなんで剣治はイクスさんを嫌っていたんだろ？？」

「あの、一つ質問していいですか？」

「一つだけならな。」

「剣治との間に何かあつたんですか？」

「……その質問は私に勝つたら教えてあげるわ。」

「ほつきにまだがり去つていいくイクスさん。今回はなかなかスト

トの中身は見れなかつた。

「……やつぱり白いな。」

「……うん、そうだね。」

僕は天使と男の友情を深めたのであつた。それから飲み物（お茶）

とおひやっぱを買って家に帰り着く。

「ただいま！みんな買つてきたよ？」

「室内は完璧にピカピカ。ビーナスもみんなで掃除場所を分担したよ
うだ。うだ。

「時雨君、私のした所はかなり綺麗だよね？」

「はい、綺麗ですね！いや～凄いですよ。」

歩く度に転びそうになるべらじすじ。 次はメイさん、やはり
彼女はメイドさんだから掃除もすゞへつまー。

「どうですか時雨様？」

「うん、流石だね。」

テカテカ光つていて眩しい！

そして最後にシャドさん。

「・・・すまん、時雨殿。あまり出来なかつた。」

他の二人に比べるとあまり綺麗になつてないが頑張つてやつてくれたのは物凄く伝わつてくる。

「いや、充分頑張つてくれたよ。で、お茶買つてきたから飲もうか

？」

そしてみんなが寝てしまつた後、僕はなかなか寝れなかつた。

「うーん、時雨殿。むこやむこや。」

僕の隣ではシャドさんが寝ている。少しこそらしたくなつた。
頬つぺたを突こうとして指を伸ばすと・・・。

ガブツ！

「・・・こひつー。」

ガジガジ。

「あだだだっー。」

ペッ！

「うわあよだれまみれだ。」

悪い事はしてはいけないなあ。僕は起き上がるひつとしたができない。足がシャドさんの足に絡まつていいのよつた状態である。

「あれへーじつかな?」

なかなか離れない。

「時雨殿ー危ないーふこいやあー。」

がばつー。

「のわー。」

シャドさんが上に乗り・・・・・完璧に起きる事は出来なくなつた。田の前にはシャドさんの顔がある。吐息を感じてなんかやばいよつな気がしてきた。頑張れ！僕！

「時雨殿ー。」

がばつ。

「うわったー！あたってるよー。シャドーー。」

それから朝になるまで僕は頑張った。気合いで。
だが、明け方になると天使に頼み気絶させてもらつた。

「うーん、うーん、うーん、うーん。」

「時雨殿、朝だ！」

「うーん、あれっ？」

がばつ。

僕は辺りを見回してシャドさんの顔を見つけた。・・・・何かが
おかしい。

「朝食が出来たから起こしてきただんだ。」

Hプロン姿である。ぼーっと眺めていると不満げな顔を僕に向け
た。

「そんなに似合つてないか？」

「いや、似合つすぎですよ。反則です。」

朝から貴重なものをおがましきりつたな。

「じゃあシャドさんが朝食作ったんですか？」

「ああ、そうだ。私が作ってみた。」

悪いが不安だ。まさかそのまま林檎が出てくるかもしれない。テーブル（いつの間にこんなものがあるんだろう）にはすでに残りの一人が座っていた。なぜか悔しそうである。

「悪いが一人には眠り薬を飲んでもらった。……今日の朝食を作る権利は私しかなかつたのだ！」

「卑怯よーシャド。」

「そりですょー！」

「負け犬がなんと言おうと負けは負け！おとなしく私が作った朝食をたべる。」

朝食はかなり普通であった。パン、林檎ジャム、林檎ヨーグルト、林檎ジユース、ウサギさん林檎なんと全て手づくりらしい。

「昨日の掃除では不覚をとつたからな。」

「へえー頑張り屋ですね。」

「時雨殿に言わると照れるな。」

悔しそうな一人は味が美味しいので文句も言えないようだ。

大会の番組が始まる時間なのでテレビをつけないと大会の番組がすでに始まっていた。

『さて、今回のゲストはイクス・リベナ・マカローさんです。』

『・・・どうもイクス・リベナ・マッカローーです。』

『イクスさんは優勝候補ですが次回相手となる瀬里奈選手はどう見えますか?』

『まあ、その子余裕かしら?』

パキッ!瀬里奈さんの箸が二つに折れた。

『じゃあ一緒に相手となる時雨選手は?』

『・・・まあ、大丈夫だと思いますが?』

ブツン!

瀬里奈さんはテレビを消してしまった。

「時雨君、行くわよつ!あのお高い魔女っ子なんて私が白はた振らせてみせるわ!」

瀬里奈さんはかなり大切な事を忘れている。

「・・・瀬里奈さん、大きなまんまでいつたら大会に出れないから小さい瀬里奈さんになつてください。」

「あ、そうだね。ちょっと小さくなるから部屋にいってくるね。」

扉を閉めいなくなる瀬里奈さん。

「・・・どうやつて小さくなるのかな?」

「スマール イトじゃないか？」

「あー、有り得ますね。」

そんな事を話していくと瀬里奈さんが小さくなつてでてきた。

「時雨君おんぶしてー。」

「わかりました。早く行きましょー。」

「ふん、自分でって甘えてるじやないか。」

瀬里奈さんはアッカンベーをして僕の背中に飛び乗つた。
「瀬里奈ー！いつさまーす！」

手を振るメイさんに見送られて僕は大会本部に歩いていった。
（こつものよつにシャドさんはどこに消えた。）

「久しぶりだね、時雨君におんぶしてもらつ。」

「そうですね、今は急成長しちゃつたから無理ですね？」

途中、浜辺の切腹さんに会つた。

「妹かい？ボウズ。」

「こえ、お姉さんです。」

「ひつやまた口りなお姉さんだ。これから遊園地かい？」

瀬里奈さんが不満そうに浜辺の切腹（自販機）をみていく。

「まあ、そんなもんです。」

「やつかい、またきなよ？おまけするぜ？」

「ありがとうございますー。」

大会本部の前で瀬里奈さんは浜辺の切腹について聞いてきた。

「あれ、何？」

「浜辺の切腹さんです。昨日ジュースを買つたらおまけしてくれたんですよ。」

「ふーん。」

『さて、残り選手もかなり減つてきました！今回の試合は優勝候補同士の戦いです！お題は巨大迷路ですっ！』

巨大迷路？まあ、とりあえず頑張らないと人間界はナマコの世界になってしまふんだっけ？

『妨害結構！その代わりふざけた真似したら覚悟してもらいますよ？それではスタートー！』

瀬里奈さんは突っ走つていった。迷子にならなければいいけど。

「時雨さん、貴方には消えてもらいましょうか！」

不思議な杖？を取り出し僕に突き付ける。 今回は・・・・・ 今は必ず今僕で勝ちたい！

「イクスさん、 僕は貴女を傷付けずに必ず勝つてみせます！」

「いづじゅない、 それじゃあ覚悟してもらいましょうか？」

イクスさんは呪文を唱え始めた。

「時雨、 倒すなら今だ！ 早く天使化すれば一瞬で決着はつく！」

「・・・いや、 僕は彼女を傷付けずに勝つ！」

「ならせめて天使化だけはしつくんだ！」

『我は、 紅き悲しみの天使。』

『太古の洪水よ我の前に立ち塞がる愚かな者を流してしまえ！』
杖の先からめっちゃ変な顔の犬？が現れ、 僕に襲いくる。

ズバッ！

僕は水の塊の犬を薙ぎ払う・・・・ハリセンで。

「やるじゃない、 次いくわよ？」

これまでかなり変な顔の動物を切り捨てた。辺りは水びたしである。

「な、なかなかやるじゃない？そろそろ本気だしたげる！」

「……ですか、それでは僕も本気出しますよ。」

まず、僕の耳には彼女の唱える呪文が聞こえる。

『・・・全ての母、水。今ここに集まり判決を罪人にくだせつ・』

『我は、始まりの罪人、そして戦争の終わりを告げる天使！』

大きななんとも可愛くない竜が僕を飲み込もうとする。僕はハリセンを横におもいつきりたたき付けた。

バシャーン！

竜は洪水となりイクスさんを飲み込もうとした。彼女が慌てて逃げるが間に合いはしなかった。

「・・・時雨、いいのか？溺れ死にするぞ？」

天使がそういうてくる。僕は黙つて洪水を眺めていたが溺れ死にしそうなイクスさんを見て、やはりハリセンを振ってしまった。

水は上に吹き飛び、雨となつた。イクスさんは迷路の真ん中で気絶していた。大量に水を飲んでしまったようだ。お腹を押すと口から水が出てくる。

「上等だよ、時雨君。君はよくやつてくれた。」

どこからか剣治の声が聞こえる。

僕が黙っていると剣治はなお続けた。

「後は君の判断に任せると。なあに命なんかいらないから安心してほしい。……早く助けないと彼女はドザエモンになってしまつよ？」

段々顔が青くなるイクスさん。だが、僕はなかなか動けなかつた。

「……『悪魔は忠告はするが誰も助けはしない。』誰かに聞いた事があるかな？」

すると僕はイクスさんを助ける行為をした。何故身体が動かなかつたかわからないが今はしなければいけない事がある。

心臓マッサージと人工呼吸だ！

僕は手慣れた感じで手早くそれを行つた。身体がなれているみたいだ。

「（＼）ほつー

口から金魚を出してイクスさんは息を吹き返した。金魚は空に駆け上がり、消えた。

僕は濡れてしまつたイクスさんの服を乾かす為にハリセンを振りまくつた。

「は、はーくしょん！」

巨大迷路にイクスさんのクシャミが響き渡つた。

・・・・・多分、彼女は風邪をひくだろうな。僕の羽はまた紅くなつた。なぜかはわからない。

やのわく 真面目な時雨ー（後書き）

なんかかなりコメ『ディー』じゃ無くなつてゐるよつなかがするのは僕だけでしょうか？さて、前回の後書きはかなり適当になつてしまいましたーごめんなさい！今回は真面目な時雨君を書いてみました！どうでしたか？よければ感想を書いてくれるとかなり嬉しいなあと僕は思います。（贅沢でありますな。見てくれるだけで僕は嬉しいです！）

やのなな 優勝したのは男? (前書き)

なんとなく終わりが近付いてるような気がします。

やのなな 優勝したのは男?

今、はまつているのはなんですか？僕は服を乾かす事にはまっています。（多分違います。）

僕は今、イクスさんのローブ？とこいつ服を乾かします。・・・
・・振り回して。

イクスさんは裸ではなくきちんと下着は付けてました。そして僕の服を着てます（ちなみに学ランです。）学ランの前が開いているのでときおり見える肌は白く、雪みたいであります隊長！

「あまいこちに風を送るな！風邪ひくでしょう！」
怒られてしまった。なんか僕おかしくなったかな？

「イクスさまあ、僕の頭を殴つて下さい！お願いします！」

「（びくつー）わ、わかった。ありがたく思えよ。」
「チーンー。

思考は良好になつたみたいだ。僕はさつとローブを乾かしてイクスさんに渡す。

「はい、終わつたよ？」

「ああ、すまないです。」

「まだに誰かがゴールしないので続いている。

「わい、なんで剣治と仲が悪いか教えて下さー。」

「・・・まあ、いいでしょ。特別に教えてあげます。」

「彼女と剣治は知り合いらしー。」

彼女がある日剣治に会いに行くと剣治はずーっとフィギュアを触っていて魔界の重要書類に全く手を付けなかつたそうだ。それに怒つた彼女は魔法を使い、美少女フィギュアの顔だけをガンムにしたそうだ。そして剣治は怒り狂い彼女はさつさと魔界に帰つたそうである。・・・・・多分これは剣治が間違になく悪い気がする。（ちなみに重要書類の中身はマオウの事だつたらしい。）

「・・・時空をどひつが悪いと想つかしらっ。」

「ひつもくそもない。悪いのは剣治である。」

「確かに悪いのは剣治ですね。」

「やうよねー悪いのは剣治よね?」

「だが・・・・・。」

「イクスさんはまず言葉で伝えたんですか?」

首を横に振るイクスさんは全く悪びれた様子はない。「だってあの状態で話し掛けても無駄ですもの。」

「もつともだと想つがやはりいけないと僕は想つ。」

「・・・今度剣治にあつたらあやまつてください。」

力チンときたと思われるイクスさんが口を開く前に僕がイクスさんの口を手で封じた。

「もがつー！」

「…………いいですか、どちらも悪いんですー今度剣治にも謝つてもらいますからお願ひします。」

まだ何かいいたげな顔をしたので更にいまとめる。

「…………白状しますが僕は剣治から貴女を・・消して構わないと言われましたが・・・消すことは出来ませんでした。それに剣治ももつそこまで怒つてしませんし、謝るなら今しかないんですー！」

渋々承諾するイクスさんを見てほつとした。

そして僕はイクスさんから口を離した。

「…………しかし、剣治が何処にいるかわからないのですよ？」

剣治は間違いないこの巨大迷路のどこかにいるー
「さつき、声が聞こえました。彼はこの巨大迷路の中になりますー！さあ行きましょー。」

僕は横になつているイクスさんを立たせたが・・・・・。

「痛つー！」

先程の洪水で足をくじいたらしい。ほつきは大会本部に置いているので空を浮く事もできない。仕方ないので背中に背負う事にした。

「ちょっとー何をするのー。」

「怪我しますから背負いながら剣術を探しますー。」
えええっーと言つ声が背中から聞こえる。

「私は歩けます、だから降ろしなさい。」

無理をしているのはすぐにわかる。

「遠慮しないで下さい。」

黙るイクスさん。僕は歩き出す。

力チツ！

巨大迷路のトラップを踏んでしまったようだ。

後ろから大きな何かがやってきた。

だだだだだだだだだだだだだだだだだだだだ！

「時雨さんー後ろからバッファローがたくさんいらっしゃってきます。」

よくあるよくある。

「魔法を唱えたいけど力が入りませんー。」

ボスの手前でMP切れ。よくあるよくある。

「くつそーー！」

僕は全速力で走り出した。

「イクスさん、しつかりつかまっててくださいっ！」「わ、わかりました。」

「どこかに隠れる場所はないかな？・・・・あ、あつたー穴の中で剣治が手を振っている！」

「もう少しで穴に入れるといひで後ろのイクスさんが叫ぶ。
「もう駄目だーもうひょひょとで串刺しになってしまつわー！」

「くそうーそして僕は何故か契約を思い出した。確か契約したら力が安定するはずだ！」

「・・・・イクスさん、僕と契約して下さいー。」

「こんな時に何言つてるのよー。」

当然のじとくお怒りになるイクスさん。僕は無理矢理背中に背負つていたイクスさんを体の前に持ってきて契約をした。別に紙でよかつたけど紙はいまないのである。

「んんつー何すんのー！」

「早く魔法を使つてくださいー今なら出来るはずですー！」

きょとんとするイクスさんに更に叫んだ。

「早くしないと僕は潰される前に貴女を襲いますよー。」

効果絶大、慌てたイクスさんは杖を取り出し呪文を唱える。

『水を集め、束ねる海の王よ！ 我の前にひれ伏しその力を使用せよ！』

本日洪水一回目がバッファロー達を襲う。なんの形をしていったかわからなかつたがバッファロー達は流されていった。

ポカーンとするイクスさん。

「・・・あんな古代魔法初めてだわ。」

自分で唱えて何を言つているんだろう。

「・・・時雨君、君が契約なんてするからあんな魔法彼女が使えてしまつんだ。・・・罪は償わないといけないよ。今後は頑張りたまえ。」

剣治はそう言い残してポカーンとしている魔法使いの所に歩いて行つた。後は剣治達の問題だから僕は静かにゴールに向けて走り出した。

途中、罠に引っ掛けついている瀬里奈さんを助け、そして様々な罠を発動させながらゴールまでやつてきた。だが・・・。

「負けませんことよ！」

すんげえ勢いでイクスさんが走ってきた。

「・・・もうきよつたかマカロニめーだが甘いわっ！」

瀬里奈さんは僕に放り投げるよつと云つた。頷いた僕は瀬里奈さ

んを投げる。『ゴールではなくイクスさんのほうに・・・。

「・・・ガン ムちゃん、後は頼んだよ！」

そういうて瀬里奈さんはイクスさんに突撃。

「スレッ ーをーん！」

剣治は何か叫びながらその光景を見ている
イクスさんに瀬里奈さんはぶちあたり、二人は氣絶。僕は『ゴール』に
向けて歩き出した。

瀬里奈さんには悪いが僕は一人共連れていった。

『ゴール！今時雨選手が氣絶した一人の選手を連れて『ゴール』しました！しかしイクス・リベナ・マカロニ選手は氣絶している為勝ったのは瀬里奈選手です！これにて解散します。』

終わつた・・・何と無く長かつた今回。僕は氣絶している二人を抱えてマンションに帰ろうとした。

「・・・時雨君、後一回で大会は終わる。せいぜいがんばってくれたまえ。」

そんな剣治の言葉を聞きながら僕は巨大迷路を後にすることであつた。

マンションに帰ると管理人さんとシスウェルさん、メイさんが歓迎してくれた。

姿がないシャドさんは誰かにロープでグルグル巻にされて僕の部屋で寝ていた。

「・・・シャドさん、大丈夫ですか？」

「んあ？時雨殿。」

僕を追い掛けていたら誰かにやられたそうだ。（犯人は間違いなく剣治だろう。）僕はシャドさんにどいてもらいイクスさんを寝かせた。時折、寝言をいうから大丈夫だろう。

「・・・やらせはせん、やらせはせんぞ・・・」「ーん。」

瀬里奈さんとイクスさんはおいでシャドさんメイさんと一緒にテレビを見ることにした。

『・・・・いや一次で優勝決まりますね？』

『そうですね、次回はどつづりプリンセスが決まります！』

いつものアナウンサーとゲストは・・・剣治？

『剣治さんは今日、巨大迷路の中まで行つてましたが大丈夫でした
？』

『はい、大丈夫でした。僕の友人が頑張つてくれたから僕は嬉しい
ですね。』

しかし、なんで剣治は迷路にいたんだろう？

『次回は優勝候補の一人目ベリル選手と新人の瀬里奈選手ですね。
ベリル選手は美しいと評判ですが、僕には必要ありませんね。』

多分、剣治には家にあるフイギュアがあれば何もいらないんだろう

うな。

だが、剣治は途端顔を曇らせていった。

『……次のお題は実力でしきつ？魔界が吹き飛ばなければいいですか。』

・・・・そんなにベリルさんは神様ですか？

『確かにベリルさんは神様ですからね。』

「ここのゴッドがでてきたか・・・・・。

『大会に出ている人達の中で一番美しく強いそうです。ファンクラブまで出来たそうです。』

す、すげえ。

「・・・時雨殿、必ず勝つてくださいー！」

「そうですー偉ぶつている神様なんかいてこまして下さいー！」

「う、うん努力はするよ。」

二人の応援され（二人のほうがかなりやる気が出でてる。）僕は頑張る事を誓いました。

神様はいるのだろうか？そして僕が（瀬里奈さん）が優勝すれば人間界に僕は帰れるのだろうか？

「ま、今度の相手は神様だ。・・・・・気を引き締めないと消されるかもしねないな。悪いが始まから本氣でいこつか？」

天使が眞面目に言つてゐるんだから間違いないだろうな。・・・

しかし、どんな顔しているんだろう。

僕は紙に書いて二人に見せた。

「……時雨殿は絵がうまいな。」

「確かにうまいですね。だけど……相手は女性ですよ?」

僕が書いた絵はお爺さんの神様であった。その後、三人で絵を沢山かきまくつファックス（シャドさんがどこからかもつてきた。）であるところに送った。

『あ、今ファックスが送られてきました!』

『誰からですか?』

『ペンネーム、ジアメさんから神様へのお便りです。……似顔絵まで書いてくれてますね。』

『……確かに書いてますがこんな顔ではありませんね。……犯人はわかりました!』

早速ばれてしまった。

「時雨様、大丈夫ですよ。別に悪い事はしてません。」

「そうだ、時雨殿は何もしてないからな。」

『犯人は誰ですか?』

『……明日、優勝者が決まりますよ。そして最後に剣治はぼそりといつた。

『……ジアメ君、負けたら帰れないからな。』

やはり明日は本気でやらないと僕に未来はないのかもしれないな。

今夜は僕が料理をすることにした。（まだ、包丁とフライパンしか扱えないし基本を教えてもらつただけだ。）

結果、食卓から声がしなくなつた。

「…………まあ、時雨殿、そのなんだ食べれないことはないな。」

「そうですね。頑張れば食べれますよ。」

それは慰めだらうか？」この二人はまだよかつた。先程起きてきた二人は酷い事を言つ。

「…………時雨君、何これ？悪いけどへたつぴだわ。」

「…………全く、こんなまずいものは初めて食べました。棄てていいでしようか？時雨さん。」

「あははあ、『自由にどうぞ』。」

ショックだ。かなりショックだ！だが、仕方ないのである。いつしないといけない理由があるので。

ピンポーン！

メイさんが席を立つが僕のほうがはやい。

「ちょっと友達が来たみたいだから僕は外にでてくるね？」

僕は振り返らずに外に出た。外にはやはり剣治が立っていた。

「…………」「苦労だね、わざとみんなに嫌われる真似をしてるのかい？明日で君はいなくなるから……だが、もし君が負ければ帰れないんだよ？」

図星だ。剣治に隠し事は出来ない。僕が黙つていると剣治は更に続けた。

「優勝候補のベリルはかなり強い。間違いなく瀬里奈姉さんは足手まといになる。」

何を言つているんだ？

「…………明日の優勝決定戦でのお題は何だと思つ？」「うーん、またろくでもない方法だらうな。

「…………ポケンバトルかな？」

「…………ハズレ、答えは実力行使の椅子取り大会。」「なんだろうそれ？

「ルールは簡単、相手を先頭不能にした後に椅子に座れば勝ち。」

「ということは相手を必ず倒さないといけないのか。」「なんとも厳しいルールだ。

「…………ちなみに発案したのは僕だ。」

なんとも酷い友人だ。

「まあ、明日は頑張るよ。」

剣治は歩いて夜の街に消えていった。

「・・・時雨。」

「・・・なあー?」

「近頃面白いく事やつてないな。コメディージャないぞ。」

「・・・やうだね。」

部屋の中ではお酒を飲んでいる人達が沢山いた。・・・いや、全員だ。なぜか管理人さん、システムさんまでお酒を飲んでいる。

「・・・時雨君、あんなまずい飯つまみにもならなかつたぞー。」

瀬里奈さんが小さいまんま僕に野次をとばす。

『やうだやうだ!』

周りの人達も同意する。

「ドッグフードの味がしたぞー。」

・・・鋭い。まさかばれるとは思わなかつた。瀬里奈さんはドッグフードを食べたことがあるのかな?

「ついでにキャットフードの味までしゃがつたぞー。」

ば、ばれた！

『やうだ！猫の味がしたぞー。』

なんか勘違いしてのような気がするがやばい！（中身を知つている僕は料理を食べる事が出来なかつた。）あと、入れたものは・・・。

「時雨殿、林檎のしんをいれたら駄目だぞー。」

やはりシャドさんにはばれたか。

「あはは、じゃあ僕は寝るね？みんなお休み。
しかし誰かに裾を掴まれた。」

「・・・時雨さん、いきなり契約とか言いながら本当は私とキスしたかつただけじゃありません？」

酒瓶を片手にもちイクスさんが聞いてくる。

「い、いえ滅相もない！あれば時間がなかつただけです！」

まだ他の人がドンチヤン騒いでいるのでみんなには気付かれていないう。

「・・・ふーん、そうですか。あれば仕方なくですか？じゃあ・・・今度は私からしてあげましょー！」

ブンブン首をふり否定する僕。

「い、いえ、結構ですイクス様！僕は貴女からそんな事をされる程

僕は何もしてません！

妖しく笑うイクスさん。

「ふふふ。私は嬉しかったんですよ？まだ助けてもらつたお礼をしてあげません！」

「いえ、結構ですよー！そうです、僕はただたんに剣治と・・・・ってうわつ！」

押し倒された！やばい動けない！まるで蜘蛛に捕まつた虫みたいだ！

「ふふふ、ありがたく思いなさい？」

「うわああーんー！」

情けない事に僕は気を失つた。最後に天使の声が聞こえたのは覚えている。

「・・・やれやれ、お前は本当にへたれだな。

余計なお世話といいたかった。

そして朝。起きたらみんな寝ていた。グッスリと眠つている。多分昼過ぎまでは起きないだろう。だが、瀬里奈さんは連れていかないといけない。僕はまだ寝ている瀬里奈さんを背負い、最後に手紙を書いた。

『今までありがとうございました。またいつか戻つてくるかも知れません』

『時雨』

「うーん、頭いたーい。」

大会本部の前で瀬里奈さんは起きたがかなり苦しそうだ。一日酔いかな？

「大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。」

声は今にも死にそうである。しかし大会本部の人達は瀬里奈さんに見学を言い渡した。つまり、神様と一人で戦わないといけないという事である。

『さあ、選手入場です！まずは神様、ベリル選手です！』

観客席は凄まじい歓声である。（特に男達からの歓声が多い。）出てきたベリルさんは確かに美しかつたが、僕は興味はなかつた。

『次に瀬里奈選手ですが一日酔いの為、出てません。』

途端ブーイングが鳴り響く。

『そして常にビックリな行動をする時雨選手ー。』

歓声はベリルさんに負けてしまったが僕には嬉しかつた。（どこかのおじさんが愛してるぜ！と言つてくれたのでぞつとした。）僕がベリルさんの前に立つとベリルさんは喋りだした。

「ふーん、弱そうな顔してるわね？」

「うーん、昨日くたれつて言われました。」

まあ、仕方がない発言である。

「今まで勝てたのも偶然ね？」

「はあ、確かにやつかもしれませんね。」

キツ！と睨まれた。何故に？

「この男、気にいらないわ！一発で倒してあげる！」
歓声が辺りに響き渡る。静かになつたところへ更に僕に聞いてきた。

「私は綺麗かしら？」

「・・・確かに綺麗ですね。」

再度歓声がなり響き、ベリルさんは満足そつな顔だ。

「どう？私を好きになつた？」

「いえ、綺麗だけど嫌いだと思います。」

僕は即答した。辺りに静寂があとずれたが、笑い声が響き渡つた。

「がははーよくこつたぞー！」

それがそのままである。ベリルさんの顔は怒りに歪んでいる。

「・・・すぐに消してあげるわ。」

田頃のストレスか僕は自分を見失っていた。（牛乳を飲んだらなおるだろつか？）

「・・・出来るならやつてください。」

そして始まりのアナウンスが流れる。

『それではっ！始めっ！』

『私は、怒りに自分を忘れし天使。』

さつさと天使化して相手のふところに入り一撃を繰り出す。・・・
・ハリセンで。

すぱあああん！

上空にベリルさんが吹っ飛ぶ。

「よくもやつたわね！」

剣を取り出し僕に向ける。上からの攻撃をハリセンでたたき落とす。

すぱん！

剣に衝撃を送り込み一瞬だがベリルさんの動きが止まる。見逃す程今日の僕は甘くない。

すぱああん！

もう一度ベリルさんがちゅうを舞う。僕も吹き飛んだベリルを追い掛け空に飛ぶ。そして地面にハリセンでたたき落とす。これを喰らったら流石の神様でも昇天である。

渾身の一撃を繰り出し、ベリルさんに振り下ろす。

「時雨やめろー！」

天使が僕を止めた。

「もういいだろ？お前の勝ちだ。」

地上に落ちていくベリルさんを助け、僕も地上におりた。

グサア！

剣が僕を貫いた。たまたま落ちてきた所に僕がいたからである。しかし、僕が避けたらベリルさんに当たっていた。だが心配しないで欲しい刺さった所は僕の羽である。

「・・・うんが良かつたな。」

「まあ、たしかに。」

僕はそのまま椅子に座った。これで全てが終わつた。
歓声が聞こえる。

「いいぞ兄ちゃんー俺と結婚しようぜ？？」

僕は大声で叫んだ。

「遠慮します！」

そのなな 優勝したのは男?（後書き）

えー実は次で終わりですー”めんなさいー優勝したのは時雨君みたいですがきちんと瀬里奈さんになっています。さて、いろいろ大変ですが最後に見てくれてありがとうございます。次回はエピロー
グです！短くなると思ってます。

そのまち プリンセス編しゅーじょー（前書き）

今回で魔界から時雨君がいなくなります。

そのまま プリンセス編しゅーりょー

辺りはお祭り騒ぎである。

ドンチャンいっている。僕は一人で大会本部から出でようとしたが誰かに腕を掴まれた。ハデスである。

「おにーちゃんどこに行くの?」

「帰るんだよ。人間界に。」

途端泣きそうな顔になるハデス。

「やだやだやだっ! おにーちゃんと一緒にいいなり!」

いいなり? 僕はハデスをじっと見つめた。

・・・・・」のハデスは偽者だ。ハデス? から離れる。

「あなたは誰ですか!」

ハデス? は笑いだした。

「ふふふつ。ばれちゃしかたないわね!」

ハデス? はハデスではなくなった。

「時雨くーん! 会いたかったよーーー!」

飛び込んできたのはアスルさんである！

「うわあ！ああああアスルさんがなんでここにいるんですか！」

僕にアスルさんが抱き着く前にアスルさんが僕から離れる。

バキュン！

僕の足元に弾丸がのめり込む。

「・・・キシス！危ないでしょ？」「なんと撃つたのはキシスであった。

「たまたま銃が暴発しただけだきにするな。・・・久しぶりだ
な時雨。」

相変わらず軍人口調である。

「うん、キシス久しぶりだね？元気だった？」

この二人とはマオウを倒す時組んだメンバーである。

「まあ、一応元気だつたぞ！」

しかしながらこの二人が？

「私達はお父さんに頼まれて大会で仕事してたの。」「頷くキシス。

「私はアナウンサー役でアスルはハデスの役をしていた。」

「うーん、わからなかつたなあ。」

ハデスがおかしいのは初めからわかつていた。あんなに元気なハデスは初めてだ。

「実はね時雨君、今回貴方を選んだのは剣治君なんだ。」

今明かされる真実。

「実際は魔王さんとじやんけんで決めたそうだ。魔王さんが勝つたら自分が出て、剣治が勝つたら時雨が出ると決めてたんだ。」

「そしたら剣治君が勝つたの！だから時雨君が選ばれたんだ。」

つまり、僕の魔界行きはじやんけんで決まったのか。だけど終わったから帰つていいんだろう。

「キシス、人間界に帰つていいいのかな？」

キシスは僕のところに近付き頷いた。

「ああ、大丈夫だ。」

キシスはアスルさんの後ろを指差しながらアスルさんにつづつた。

「あ、魔王さんがアスルを呼んでるぞ？」

アスルさんは走つて行つた。

キシスは僕に向き直つたが顔が赤い。
「どうしたのキシス？病気なの？」

頷くキシス。

「ああ、病氣だ。」

「病名は？」

凄い病氣なんだろうな。

「・・・・恋の・・・病。」

「・・・・ちなみに誰からどうやってうつされた？」

「誰かさんがお別れの挨拶をした時。そしてこれはあの時のお礼だ
！受け取れっ！」

狙撃銃を構えたので目を閉じてしまった。

唇に何か当たった気がする。目を開けるとキシスの顔が目の前に
あつた。

キシスは顔を離しそっぽをむいた。

「・・・・お礼だ。」

「あ、うん。ありがと。」

キシスは笑つてくれた。

「すいません、お邪魔虫です。」

現れたのは剣治だつた。・・・・覚えている方は凄いです。

「剣治、どうしたの？昔のネタ使って。」

「剣治はどこでも アを出してから僕にいった。

「君に話がしたい女の子が来ているぞ？」

剣治の後ろにはベリルさんがたつていた。
僕を指差し高らかに宣言した。

「・・・貴方は私に対して手加減しましたね？いいでしきう宣戦布告として受け取ります。・・・なめられたものです。最後にお聞きしたいのですが何故貴方は私に手加減したんですか？」

答えに困っていると剣治と天使が僕に智恵を貸してくれた。（後でかなり厄介な事になつた。・・・悪魔である。）

「えーっとそれは貴女が女の子だからです。それに真っ直ぐな性格だから手加減しました。」

天使と剣治から言われた事をそのまま伝える。

何故か顔を真っ赤にしてベリルさんは僕にむかつていった。

「あ、ありがたく思ひなさい！貴方を私の・・・婿候補にしてあげるわ！」

走りさつていった。キシスは僕を睨み付けている。

「お前はもうちょっと人を疑え！ああいのは自分で考えて言ひつものだ！」

「た、確かに。」

剣治を睨み付けようとしたらいすゞアドアを潜っていた。

「時雨君、早くこなことけしけりうつよ~。」

僕はキシスに挨拶した。（普通に）

「じやあね、また今度ぐるみ。」

「ああ、約束だ。拙切りをしよう。」

「はは、わかつたよ。」

やつぱり子どもだなあと思つたらキシスは大胆であつた。僕に抱き着いたのだ。

「時雨、私をガキ扱いするなよ？」

見透かされていた。

「あ、うんわかった。」

僕を抱きしめキシスは離れた。すると今度はアスルさんが走つて來た。

「ストップ！ 時雨君ちょっとまつたー。」

ゼーゼー言いながら僕に手紙を渡した。

「あ、後で見てね？お父さんからだから。」

そして僕にキスしようとしたがキシスが僕に蹴りをいれドアに押し込んだ。

「ちよつと、キシスなにするの？感動の別れじゃない。」

「感動は一度でいいんだよ。今回は私の勝ちだな。」

いつして、僕は魔界からいなくなつた。瀬里奈さん達には僕の住所を書いた紙を渡してある。（酔っ払いじもの上着や田の前においてきた。）

そして、彼女達の後日談である。

管理人さんとシスウェルさんはマンションにいるらしい。

「今日はいいお天氣ですね、シスウェルさん。」

「……いや、地下だから天氣は関係ないでしょ。」

次に女王となつた瀬里奈さんとそれを助けるイクスさん。

「時雨さん、ありがたく思ひなさい。今度私が貴方と契約して使えた魔法を教えてあげるわ！」

「ちよつと何隠れて時雨君に手紙を送ろうとしてんの？私が送るからあんたは書類を片付けなさい！」

僕に宣戦布告されたと勘違いしたベリルさんは修行をしていろらしい。

「…………ふ、ふふふふ。あいつを倒して私の家来もしくは…………ふふふ。」

僕の影だったシャドウから連絡がない。

「ハヤシ林檎を向こうとシヤドウを思って出すなあ。」

「時雨殿、林檎を持って行つて構わないか？」

「…………？」

メイドだったメイさんは剣治の家にいた。

「お久しぶりです。時雨様！ 今度貴方の家に行つていでですか？」

「はい、別にいいですよ。」

「…………時雨君、家のメイドを誘惑しないでくれたまえ。」

最後に会ったキシスとアスルさんは魔王さんから色々な仕事をもうらう働いているらしく。

「あーーー時雨君の[?]真一いつ撮つたの？」

「秘密だ。アスルに教えたつていい事ないからな。」

「ちようだい？」

「…………却下だ。」

そして、魔王さんからの手紙の事を少し僕は忘れたままだった。

そのはち プリンセス編しゅーりょー（後書き）

プリンセス編終わりました。懐かしい？人達も出ましたがどうだつたでしょうか？みなさん忘れているかもしけませんがハーデスは真面目に学校にいっています。さて、御意見御感想は評価と言つ名のB〇×にしてくれると嬉しいです。（なーにいってんだか。）次回は帰ってきた時雨君ですが、今までいた人がいなくなつたり、新たな変人や事件に巻き込まれたらいいなと思います。まあ、どうかこれからもよろしくお願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8355a/>

アンノウン・プリンセス

2010年10月28日08時55分発行